

# **ボランティア通信**

**JIN-KANA 学習塾**

**神奈川県立中学校**

**六角橋中学校**

**松本中学校**

**港中学校**

**栗田谷中学校**

**老松中学校**

**戸塚中学校**

**戸塚高校定時制**

**白幡小学校**

**大口台小学校**

**二谷小学校**

**神橋小学校**

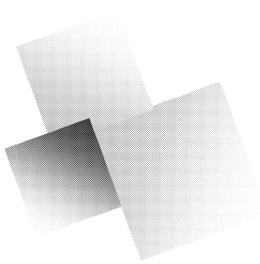
**中丸小学校**

**南神大寺小学校**

**のびのび学習塾**

**青少年の居場所**

**2014年2月15日**



# JIN-KANA学習塾通信 NO.1

発行日 2014年2月15日

## はじめに

～神大と神奈川区の協働による「JIN-KANA学習塾」オープン～

神奈川大学教職課程  
入江直子

神奈川大学教職課程では、**2010年度**に横浜市こども青少年局の委託事業「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」を受託し、JYSP（神大・ユースサポート・プロジェクト）として取り組みを始めました。近隣の小・中学校への「学校ボランティア」、土曜日の午前中に大学でおこなっている外国籍児童生徒の学習支援「のびのび楽習塾」、地区センター等での「青少年の居場所」活動への関わり等に取り組んでいます。さらに**2013年8月末**からは、神奈川区の委託事業として、家庭の経済的な問題や母語が日本語でない等、高校進学に向けて支援を必要とする神奈川区内の中学生の学習支援「JIN-KANA学習塾」を始めました。

中学生たちは、神奈川区から紹介されて、週2回、夜6:30～8:30に神奈川大学の教室に通ってきて、教師をめざしている学生ボランティアと1対1で学習に取り組んでいます。学生たちは、「どう説明したらわかるか」悩みながら準備をし、中学生に一生懸命関わり、わかった時には、我がことのように一緒に喜んでいきます。そして、ボランティア同士、工夫を共有して進めています。教師をめざすのに「とてもいい学びの場」になっています。

8月に、教師をめざしている4年生（中には**2014年4月**から教師になる学生もいる）・3年生、所属学部は法学部・経済学部・外国語学部・人間科学部・工学部、取得予定の免許は社会・英語・数学と、多様な学生（約15名）が集まって、学生同士で相談し、手探りで準備を始め、8月末には、不安を抱えながら中学生を迎え入れました。

それから約4カ月、学生たちが一人ひとりの中学生に温かく真剣に向かい合う中で、中学生たちは安心して分からないことを「分からない」と言えるようになり、一人ひとりのペースで繰り返し問題に取り組めるようになっていきます。4カ月間、無欠席の生徒も何人かいて、通ってくる生徒たちにとって「安心な居場所」になっているように感じます。そしてまた、何より学生たちにとっても、生徒との関係を感じながら「教えるということ」を実践的に学びあうことのできる「居場所」になっています。そうした4カ月間の「自分の学び」を学生たちがふり返り「通信」として報告します。今後とも、温かく厳しいご支援をよろしく願いいたします。

## 目次

JIN-KANA学習塾で得たもの	3
スタッフ 小高敬史	
「わかろうとしている存在」	3
英語英文学科4年 室井 博	
さらに先へ	4
人間科学科4年 松本大輝	
共に学び合うこと —Iさんを担当して—	4
自治行政学科4年 早川真央	
「自分ってすごい!」と気付いて欲しい	5
現代ビジネス学科4年 土屋萌子	
生徒との関わりから得たもの	6
現代ビジネス学科4年 渡辺定智	
JIN-KANA学習塾で得たもの	6
人間科学科4年 青木友美	
JIN-KANA学習塾レポート	7
法律学科4年 柏 浩太	
小さな歩幅の、大きな変化	8
英語英文学科3年 徳永上総	
生徒が課題を見つけること	8
情報システム創成学科3年 西尾真由子	
大きな一歩	9
電子情報フロンティア学科3年 勝俣恵梨奈	
JIN-KANA学習塾を通して学んだこと	9
英語英文学科3年 田端真侑	
指導の前に人間関係を	10
英語英文学科科目等履修生 本田耕大	

## JIN-KANA学習塾で得たもの

スタッフ 小高敬史

私は、今年の8月末より「JIN-KANA学習塾」に学生の責任者として参加しています。塾が始まった当初は、授業の仕方、生徒との接し方などすべてが手探りで、授業をしているときに感じた悩みを空いている時間を見つけて学生同士で相談し、共有しながら少しずつ形にしていきました。塾が始まって1ヵ月がたつと流動的だった生徒と学生の組み合わせも決まりだし、1人の生徒に1~2人の学生が責任をもって授業を行い教材準備や学習計画も担当の学生が立てるといった形になりました。

私が担当しているのは、中学2年生のNさんです。Nさんは、ほとんどの教科に関して苦手意識はなく、学校の授業を受けていて分からないということがあまりないという生徒です。特に何か覚えるということに苦手意識はなく、Nさん自身も暗記することは得意だと思っているようでした。Nさんを始めて受け持った時、基礎基本がしっかりとし身につけていて、自分が勉強したいことも明確でしっかりしているなという印象を受けました。

しかし、何度か授業していくうちに少しずつ気になる点も出てきました。私も中学生の時はそうだったように、分かりにくい所や想像しにくい所があるとやり方や解き方を暗記し、なぜそのようになるのかという事を考えずに暗記することに頼ってしまうということがありました。そのため、応用問題や自分の言葉で説明するような問題になると上手く解答できないということがありました。そこで私は、毎回授業の中でNさんが自分の言葉で説明する時間を設けるようにしました。最初の方は、声を出して自分で説明することに戸惑っていましたが、少しずつ慣れてくると「私よくここ分かってないですね」と自分で分かっていないことに気がつくようになってきました。また、最近では記述式の問題や普段書いてもらっている感想も具体的に明確に書けるようになってきました。

また、受け持った当初はあまりなかったのですが、最近では私から質問しなくても部活動での出来事や自分の興味のあることをよく話してくれるようになってきました。これは、JIN-KANA学習塾という場がNさんにとって安心して日常のことを話せる場所になってきた証だと思います。

私は、この塾に参加して様々なことを学んでいます。Nさんとの学習を通して、人に何か教えること、伝えることの難しさを日々感じ、毎回どうやったら興味を持ってくれるか、これで伝わるかということを考えながら準備しうまくいったり、失敗したりを繰り返しています。また、生徒たちと接することで生徒の微妙な変化に気づけるようになってきました。この塾で試行錯誤を重ね、人に分かりやすく説明すること、生徒との接し方などこれから実際の学校現場に入っていく私にとってとても貴重な経験を多く積むことができました。ここでの経験を実際の学校現場でも生かしていきたいと思っています。

## 「わかろうとしている存在」

英語英文学科4年 室井 博

私が担当するH君との最初の出会いは、JIN-KANA学習塾(以下、学習塾)ではなく、私が毎週お世話になっているボランティア先の学校でした。つまり、最初の出会ってから現在まで、約10ヵ月に渡って彼の成長過程を見ているということになります。そこで、ここでは学習塾だけではなく、彼の学校生活の様子も取り入れながら、彼の成長をなるべく詳細に書いていきたいと思います。

率直に言いますと、10ヵ月前のH君と今現在の彼とでは全く違う印象を持ちます。当時の彼は髪の毛が目にかかるほど長く、授業中や廊下などで話した時の印象も決して明るいとは言えませんでした。また授業中も寝ていたり、起きていても教科書を開かなかつたりという状況でした。しかし、今では髪の毛もすっきりし、そのためか、雰囲気や話し方も以前に比べて格段に明るくなったように思います。また、最近彼から、「友達から前よりもよく笑うようになったって言われたよ。自分でも前よりも明るくなったと思う。」と言われ、私自身非常に嬉しい気持ちになりました。そして何より、学習塾に来ているということからもわかるように、勉強に対する熱意のようなものも今では彼から感じることができるようになりました。

ではなぜ、このように劇的な変化がH君に起こったのでしょうか。結論から言いますと、根本的なところにおいて、彼の性質は何も変わっていないのではないかと私は考えています。言い換えるならば、彼は元々勉強に興味があったのではないかということです。このことは彼が実は、熱心な読書家であるということからも推測することができますが、私は10ヵ月間、少ない時間ながら彼と過ごしてきて、このことを確信する出来事を経験しました。それは私がボランティアで授業中に彼の補助をしたときのことでした。その日もやはり、教科書を開かない彼に対して、私は「英語のどこが嫌い？」と尋ねました。すると、彼は「英語は発音がわからないから嫌い。」と答えてくれました。そこで私は教科書に英語の発音をカタカナで書き、彼と発音練習を中心に行うようにしました。これが功を奏したのか、少しずつではありますが、英語に興味を持ち始めています。

この出来事からわかったことはH君にとって学校は学べる環境ではなかったのではないかということです。後日、彼に「発音がわからないなら、なぜ、学校の先生に聞かなかったの？」と聞きました。すると、彼は「今更、そんなことを聞くのは恥ずかしいし、先生はいつも忙しそうだから。」と答えました。そういった意味でこの学習塾は彼のペースで学べる環境になっているのではないかと考えています。H君に限らず、生徒は皆「わかろうとしている存在」なのです。

しかし、その生徒に適した学習環境が無いために、いつの間にか「わかろうとしている存在」が「わからない存在」もしくは「わかろうとしない存在」になってしまっているのではないのでしょうか。私はこの学習塾で彼だけでなく、色々な生徒を見てそのように強く思います。

現在、H君はこの学習塾で文法や単語などを1年生からやり直しています。以前にやった内容ということもあり、非常に楽しみながら勉強に取り組んでいると思います。依然として、単語や文法などいたるところに課題はあるものの、学習塾に来た当初に比べ、書くスピードは格段に速くなり、字もきれいになりました。特に発音に関しては非常に英語らしい発音になってきています。そして何より、単語も積極的に覚えようとしていますし、わからないところも積極的に質問をするので、英語に対する意識も前向きに変わってきたと彼と会うたびに感じることが出来ます。

今後の予定ですが、勉強方法は今まで通りH君のペースを大事にし、少しずつではありますが、着実に前進していきたいと考えています。この先もこの学習塾がH君にとって学べる最高の環境であり続けるために、彼は何をわかろうとしているのかを私自身が常に考え、共に勉強していきたいと思っています。

## さらに先へ

人間科学科4年 松本大輝

私は現在、JIN-KANA学習塾の中で、中学3年生の女子生徒0さんの数学の学習支援を行っている。

0さんは、学校での成績ではオール5を取れるほどの実力を持っている。学習活動の中でも、自分が納得するまで質問をし、内容を理解することに積極的である。例えば、数学で図形の角度を求める問題では、「角Aと角Bが〇〇度だから、この合計が〇〇度になって、角Cは〇〇度になる」という言葉での説明だけでなく、次に同じような問題が出てきたときに応用できるようにするために、「式で表すとどうなるのですか」と、式という整った形で提示することを望んでくる。自分が納得するまで理屈の通った回答を求める姿勢は、とても中学生とは思えないほどである。また、委員会活動や部活動などにも積極的に参加していて、学習塾に参加した際にはよくその様子を話してくれる。

0さんが通う中学校では、高校入試の際に志望先の高校に提出する成績も出て、現在は年明けに行われる高校入試本番の試験に向けての学習をしている。具体的内容としては、過去に行われた入試の問題を解き、問題の傾向と対策を考えるということを行っている。0さんは、数学が苦手だとは言っているが、どの問題も少し時間を取ればあきらめずに必ず自分なりに答えまで辿りつく。どうしてもわからない時には、「わからないです」とはっきりと言ってくる。そのため、教える私としても、何がわからないのかがわかり、時間も有効に使うことができています。

しかし、0さんにも入試までにさらに力をつけるために必要なものがある。その一つは、自信である。0さんは、ときどき「男の子の方が本番は強いですよ」といったことや、一問間違えただけで「私絶対ここ本番でも落とします」と弱気になってしまうことがある。その際に、私は、「まだ時間はあるから大丈夫」、「解き方の発想としては間違っていないし、これから同じような問題をいくつかこなしていけば慣れるよ」といった声かけをしている。最近では、「私絶対ここ本番でも落とします。だから慣れるしかないですね。もう一問やってみます」と後に言葉が続くようになり、今までは下を向いたままだった気持ちが上を向こうとするようになってきた。

また、もう一つ必要なものは、柔軟な考え方である。具体的に言うと、図形の展開図から組み立てた図形を想像することなどである。式などの目に見えて整った形であるならば、理解がとても速いが、「ここここが重なるからこんな感じになるんじゃないか」という曖昧な発想が0さんには難しく感じてしまう。数学に限らず柔軟な考え方というのはとても大事である。私はこれから0さんに対してどのように声をかけていくことで、柔軟な考え方を身につけさせることができるか考えていきたい。

0さんは、入試だけでなく、その先高校に入学した後や、将来についても明確に思い描いているものがある。私は、そんな0さんの力になれるように、たとえ苦手の数学でも頑張っって関わっていきたくと思う。

## 共に学び合うこと-Iさんを担当して-

自治行政学科4年 早川真央

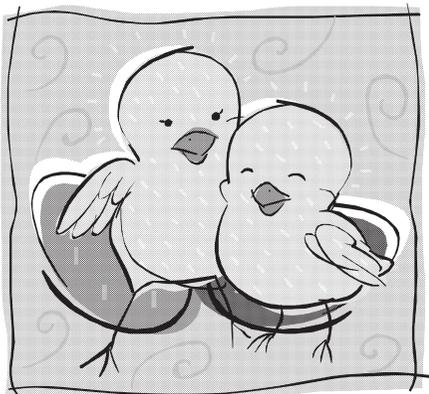
JIN-KANA学習塾が始まって、約4ヵ月が経ちました。教師になるという同じ目標を持った仲間と共に、どのように進めたら生徒は通い続けられるだろうかと考え、準備してきたことを懐かしく思います。ここに通う生徒とも回数を重ねるごとに距離が縮まり、一緒に学習している時の話や感想用紙から、悩みや本音が言える場所になってきているのではないかと感じられます。勉強はもちろん行いますが、学校でもなく、家でもなく、この場所だから言える生徒の話をしっかりと聞いて受け止めてあげ、そんな意識を持って活動を続けています。

私は母語が英語である中学3年生の生徒と共に、国語の学習をしています。日本語による会話にあまり支障はありませんが、小学校からの漢字の読み書き、また文章を読んで内容を理解するという部分においてサポートをしています。高校入試も控えていることもあり、文章読解のコツを掴み、少しでも国語に対しての苦手意識をなくしてほしいと思い、毎回準備をしていました。しかし、勉強することに対してあまり意欲的でない彼に、この学習塾に通うことを楽しみに思ってもらうにはどうしたら良いのかと、とても悩みました。

以前、休憩中に彼が「言いたいことを上手く日本語にして話すのが難しい。」と言っていたことがありました。そこから私も海外において「もっと話したいけれど、上手く話せる自信がないから伝えるのを諦めてしまう」というもどかしい気持ちをしたことを思い出し、文章問題を解くことばかりではなく、もっと会話を多く楽しむのがよいと考えました。「国語」を学ぶだけでなく、この教科を通してもっと日本語に親しみを感じ、自信を持ってコミュニケーションをとってほしいと思います。

勉強も受け身ではなく、たくさん彼の声を引き出せるよう、テキストの題材に関する彼の意見を聞いてみたり、会話を通して様々な日本語の言い回しを学んだりすることを意識的に行っています。その際、ゆっくりでも最後まで彼の話をしっかり聞くことを心掛けると同時に、私自身も英語で会話してみようと積極的にチャレンジをしています。間違いを恐れず、お互いに学び合いながらコミュニケーションを多く取っていくことで「この日本語の使い方は間違えてない?」「何て言えばいいの?」などと積極的に聞くようになりました。これによって机に向かって問題を解くことだけが勉強ではなく、個々の必要な力を考え、それぞれのニーズに合った学習を行っていくことが大切であると気がつくことができました。

目の前の生徒がこの先どう成長していったらいいか、そのために私たちは何ができるかと仲間と共に考えて実践していくことは、学校教育でも同じだと考えます。また何より、それぞれの生徒の何らかのよい変化が見られることを本当に嬉しく思います。生徒と共に、仲間と共に学び合いながら、このJIN-KANA学習塾を通しての学びを今後の自身の成長に活かしていけるよう引き続き取り組んでいきます。



## 「自分ってすごい!」と 気付いて欲しい

現代ビジネス学科4年 土屋萌子

私がEさんと出会って、4ヶ月が経ちました。思い返すと、短い期間ですが様々なことがありました。そのことが、今の私に繋がっていると思います。私はEさんに出会ってから、他人の小さな変化に気付くことができる感性が身に付いたと思います。

そしてEさんは、最初に比べ少し自分に自信を持ったような気がします。今までどのようなことがあったのか、少しずつ振り返っていかうと思います。

まず、初めて出会った日の事です。Eさんも私も、とても緊張していたことを思い出します。このような時こそ初めが肝心だと思ったので、お互いの呼び名を決めました。そのおかげで、Eさんの笑顔を初めてみることができました。そこから緊張がほぐれたようで、Eさんと様々な会話をする事ができました。そしてこの日の最後に、「またここに来たい!」と言っていました。この言葉は、Eさんにとっては何気ない一言だと思いますが、私にとっては忘れることのできないくらい嬉しい一言でした。

そして何回か塾を通して話をしていく中で、少しずつEさんがどのような生徒なのか理解することができました。Eさんは、絵を描くことが得意で、面白いことがあると絵を描いて示します。また、何事にも一生懸命で、やると決めると最後までやり遂げることができます。探究心があり、わからないことはわかるまで考えようとしています。そして、優しく人の気持ちを考えることができます。しかし、これだけ素晴らしい生徒であるのに自分に自信がなく、少し間違いがあると「どうしてこんな問題もできないのだろう。」と自分を責め、暗い気持ちになってしまいます。このことに気付いてから、Eさんは勉強面でもそれ以外でも自己肯定感がなく、自分を責め続けてきたのだらうと思いました。そこで私は、このJIN-KANA学習塾で会える機会を通して、少しでもEさんに「自分はやればできる!すごい!」と感じさせたいと考えるようになりました。

そのためには、一番は「褒める」ことを大切にしていこうと考えました。どこがよかったかを具体的に示し、もしできていなかったとしてもどこまで理解できているかを明確にし、わからないところを共にわかるようにしていく心がけました。その結果、以前に比べ少しずつ「やればできる」と思うようになってきていると思います。このまま、少しずつ自己肯定感を持つことができるようにしていきたいと考えています。

しかし、最近では褒められることがEさんにとってお世辞にとらえられているようです。決してお世辞を言っているつもりではないのですが、最近勉強しているところはEさんにとって壁になっているところであるため、「わかった」という達成感を感じる事ができていないのだらうと思います。ただ「褒める」だけではなく、生徒が「達成感」を感じてから褒めるからこそ、自己肯定感が身に付くのだとその時気付きました。

したがってこれからは、Eさんが達成感を感じられる工夫を考え、少しでも多く「自分ってすごい!」と思えるようにしていきます。そしてまた最後に、Eさんが「ここにきてよかったです」と思えるような場所になるよう、心がけていきたいと思いま

## 生徒との関わりから得たもの

現代ビジネス学科4年 渡辺定智

私はこの学習塾の中で、主に社会科と国語科を中心に関わっており、学校の宿題を一緒に取り組んだり、定期テストに向けてテスト範囲の対策を行うなどしています。また入試に向けた対策も少しずつ取り入れるなど、限られた時間の中で充実した学習を支援できるように工夫しています。さらに学習のみならず、普段の学校での出来事を話したり趣味の話をするなど、会話でのコミュニケーションを心がけています。

これまでの取り組みを通して、生徒のみなさんとの信頼関係が築かれてきていることを実感し、自分自身充実した学びの機会となっていることを感じています。同時に、単なるボランティアとしての意識を越え、目の前の生徒と向き合っていく責任を強く感じています。初めはワークなどの問題集を解かせるだけで終わってしまっていたのですが、今では生徒の学習進度や興味に合わせ、指導法や教材を工夫するように心がけています。私が用意した教材を一所懸命に取り組んでいる姿を見ることで、自分自身教材研究を楽しんで取り組むことができています。模擬授業とは違い、目の前の生徒を想いながら教材研究をすることは教育実習以来のことです。初めは自分でも半信半疑でしたが、今では教師を目指す身として充実した学びの場となっています。まだ未熟ではありますが、教壇に立つ前にこれだけの緊張感、責任感、それと同じくらいの喜びを味わえたことは、自身の大きな財産であると確信しています。

私が担当するKさんは、国語と社会に強い苦手意識をもって、初めは集中力を持続させることに苦心しました。そこで、彼女が興味をもって楽しく学習するためにはどんな教材が適しているのかを考え、資料を工夫しました。いくつか例をあげてみると、Kさんは英語が大得意であり、海外で生活した経験があります。それを活かして海外の新聞記事を原文のまま示すなど、英語と関連付けた資料によって興味を引き付けました。公民の「裁判所」を取り上げた際には海外のおもしろ判例を紹介し、内容にスムーズに入ることができました。

国語においても、活字のみではなく写真資料によってイメージをふくらませ、作者の心情に迫る工夫を心がけています。

少しずつではありますが、最近の後半まで集中して取り組めるようになってきました。またコミュニケーションをかさねる中で、勉強中でも笑顔が多く見られるようになり、楽しんで学んでいると感じています。本人ははっきりと「キライ」と言い切る国語・社会ですが、問題を解きながら少しずつ好きになってくれると嬉しいです。

これからの課題は、教える側の解説を短く的確にすることで、生徒が自ら話し、説明する時間を長く設定するということです。生徒が受け身になってしまわないように、引き出した興味が次の一步につながるような指導、教材を工夫し、研究していきたいと思えます。そして、私はここで学んだことを自分自身の力にかえていけるように、日々努力し、前向きに取り組んでいきます。

## JIN-KANA学習塾で得たもの

人間科学科4年 青木友美

「JIN-KANA学習塾」は、昨年の8月から始まり、約4ヵ月が経ちました。ようやく、学生ボランティアも支援することに慣れてきましたし、生徒との関係も深くなってきたように感じます。しかし、初回を迎えるまでには、生徒の様子が全く分からず、アドバイザーの元校長先生にも「生徒が喜んで来るとは限らない。定期的に通ってこない可能性もある。」と言われ、不安もありました。そんな不安と、生徒との出会いに期待を抱きながら、教室作りや活動記録用紙の内容まで、学生ボランティア同士のミーティングを何度も重ね、準備をし、初回を迎えました。初回は、学生ボランティアの自己紹介から始まり、中学生にも自己紹介をしてもらいました。お互いに緊張していた様子がとても懐かしく感じられます。初回を終えてから現在まで、1対1で、なるべくコミュニケーションを図るよう、心がけています。すぐに学習支援には入らず、コミュニケーションの中で中学生のニーズを読み取り、個々のニーズに合わせた支援方法をそれぞれ考え、工夫しています。必要があれば、小学校の内容まで戻り、支援をします。「高校進学」という一つの目標もありますが、それ以上に、生徒に勉強を好きになり、楽しんでもらいたいという思いがあるからです。

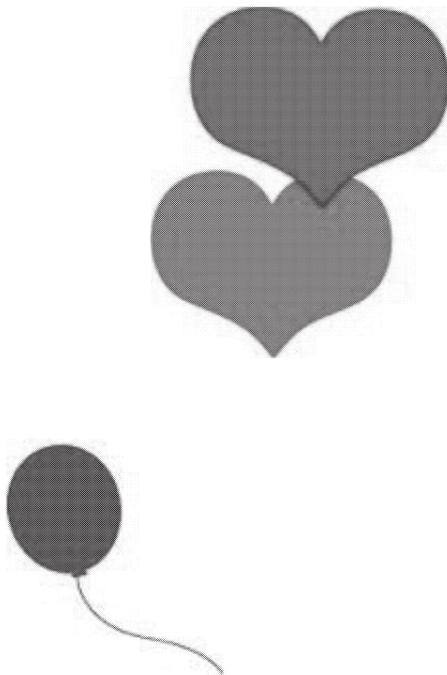
「JIN-KANA学習塾」が生徒にとって1つの居場所とってくれたら、それは本当に喜ばしいことです。

私が主に支援している生徒は、「JIN-KANA学習塾」に通っていることを友人に話したところ、とても羨ましがられたようです。その理由を尋ねると、とても楽しい場所と説明したからだと教えてくれました。それは、その生徒にとって、楽しい場所となっていることの表れであり、嬉しかったです。

さらに、最近、その生徒から「中学校の英語の授業で挙手する人が決まっていて、挙手したいけどできない」と初めて悩みを打ち明けてきました。それを聞いて、その生徒にとって、JIN-KANA学習塾は単なる楽しい場所というわけではなく、一つの居場所となっているのだと感じました。最初の頃は、緊張していた様子でしたが、最近では、表情も明るく、部活や好きなアーティストの話をしてくれるようになりました。回数を重ねるごとに、親しい関係を築けていると思います。学習面においても、自信がついてきて、自分の考えを表現する能力が上がってきているように感じます。

その生徒を支援して、私は、説明の仕方や教材を工夫し、生徒が少しでも「わかった!」、「できた!」と喜びを感じられるようにすることに改めてやりがいを感じられるようになりました。そして、JIN-KANA学習塾は、私にとっても一つの居場所となっています。

また、JIN-KANA学習塾に携わっている学生たちは、火・木の授業のときはもちろん、教材準備等で顔を合わせる機会が多くなり、ますます絆が強くなっているように感じます。学生と生徒のつながり、生徒同士つながり、学生同士のつながり、JIN-KANA学習塾がたないでくれる人々のネットワークを大切に、これからも生徒の心の居場所の一つとなれるよう、焦らず、支援を継続していきたいです。



## JIN-KANA学習塾レポート

法律学科4年 柏 浩太

昨年の8月からJIN-KANA学習塾がスタートしました。大学生は数学や英語など特定の科目をそれぞれ担当し、子どもたちの勉強したい科目に合わせて担当者を割り振っています。現在は、多くの子どもたちが自分の勉強したい科目をはっきりさせているため、大学生とのペアをある程度固定し、それぞれの進路に向けた学習を日々頑張っているところです。

私はK君という生徒を主に担当しています。塾が始まって間もないころはすごくとおとなしいという印象で、勉強中でも質問などはほとんどありませんでした。また、学習の終わりにはコメントシートを配っていますが、K君は「楽しかった」「難しかった」というように一言の感想が多かったように思います。

しかし、回数を重ねるとK君のほうから学校の出来事を話したり、わからない問題について質問するようになり、コメントシートの感想も文章量が増え、内容も具体的なものを書くようになりました。私がK君を教えるにあたっては、当初は問題演習と説明中心の授業をしていました。しかし、コメントシートの感想が一言しかないというのが続いたことで、そのくらいの印象の学習しかできていないのだと感じました。そこで、説明中心ではなく会話や質問を増やしたところ学習中の様子やコメントシートの感想にも少しずつ変化が出てきました。塾が始まるにあたっては、子どもたちに楽しく勉強に取り組んでもらいたいという思いがあったので、K君の変化は塾に来ることを楽しんでいる、と前向きにとらえています。

一方で、私自身が努力しなければいけないと感じる部分も多くあります。K君に関して言えば、塾に来始めたころは数学や理科を勉強したいとの希望がありました。私にとっては専門外の科目である数学、理科をどのように教えればいいのか非常に悩み問題演習を行いました。問題が難しくすぎて手がとまってしまうたり、逆に簡単すぎて手ごたえがなさそうな様子が見られました。子どもたちの力を伸ばすためには、適切な課題を提示してあげる必要があります。その意味で、子どもたちが何を必要としているのか、ニーズは何なのかをしっかりと見極めることが大切だと感じます。

また、コメントシートの重要性も改めて感じています。子どもによってその内容は様々ですが、共通している部分もあります。それは「次は社会を勉強したい」「数学の証明についてもっと勉強したい」というように意欲的なコメントが書いてあるときです。これは、毎回の学習での「できた」という小さな成功体験が積み重なった結果だと思います。勉強に対して前向きな気持ちになるには、自分の力で問題が解けたときのように自分に力がついていると感じるときや、興味を惹かれるような内容の学習のときだと思います。両方を兼ねた学習をすることはなかなか難しいですが、少しでもそこに近づけるようにしていきたいです。そして、勉強の面白さを経験してもらえるように努力していきたいです。

小さな歩幅の、大きな変化  
英語英文学科3年 徳永上総

JIN-KANA学習塾のプロジェクトが始動して早くも半年近くが経とうとしています。夏の初めに声をかけて頂き、即答で「やります!」と答えたのですが、家で一人、考えました。「果たして私はその生徒たちに責任を持てるのか」と。高校受験という人生の大きな局面を目前にしている生徒たちがほとんどです。さらに、蓋を開けてみると、英語や数学、理科など苦手な教科をたくさん持つ生徒、日本にやってきたばかりの「帰国子女」の生徒、「いじめ」の経験を持つ生徒と様々でした。様々な懸念と不安を胸に抱いたまま、私はJIN-KANAに飛び込んだのです。今日まで、一人の男子生徒、Tくんに寄り添い、共に学習してきました。JIN-KANAが始まって当初、彼に初めて会ったときは率直に「勉強が嫌いなタイプ」だなど感じました。中学3年生なのですが、1年生の文法事項も曖昧な上、すぐにペンを置いてしまうことが多く、連続して与えられた課題に集中して取り組めない状態でした。しかし、すべては私が間違っていたのです。be動詞と一般動詞の区別もあやふやな彼に、現在完了形を叩き込もうとしていたのですから。そして、気づきました。Tくんは勉強が嫌いなタイプなのではなく、「勉強の方法がわからない」だけだったのです。過去に学校の授業につまずいてしまった彼はそれ以来、放棄してしまっただけです。学校でのノートはスカスカで、白紙のページが多く、提出物も出せていない状況だったため、自宅学習の習慣化をまずは目指しました。毎回、少しずつ宿題を課し、少しずつ増やすことを繰り返していくうちに、Tくんも自宅学習に慣れたのか、少しずつこなしていくようになりました。

そして、中学1年生の春に学習するような内容から少しずつ英語に触れさせ、「できた!」という成功体験をさせました。その際、私が心掛けているのは「喜びを共有する」ということです。「こんな簡単な問題、解けて当たり前」というようなスタンスでは、次のステップへの生徒と私、両方のモチベーションが保たれません。生徒とハイタッチをしてみたり、こぶしを強く合わせたりすることで、共に喜びを分かち合う場面をつくり、心の距離を縮める努力を試みたのです。すると、今まではなかなかバッグからテキストを出そうとはしなかったのですが、私が席に着くと、すでに机の上にはテキストが広がっているようになったのです。小さな歩幅で、私たち2人を客観的に見ると小さな変化ですが、Tくんと私にとって大きな変化だと確信しています。

最後に、JIN-KANAの生徒たちを見ていて、「勉強が嫌いなタイプ」などいないと思い知らされました。個々の問題は人それぞれであり、それぞれのサポートが必要ですが、「知りたい」「理解したい」という気持ちは誰もが心の底に持っているのです。生徒それぞれのニーズ、問題を共に共有し、生徒と寄り添いながら学習する場所、それがJIN-KANA学習塾です。当初の不安や懸念などはどこかへ吹っ飛んでしまいました。

生徒が課題を見つけること  
情報システム創成学科3年 西尾真由子

JIN-KANA学習塾の活動に参加して、約4か月経ちました。始めた頃は、中学3年生が小学校の内容でつまづいていてどうなるか不安でしたが、子どもたちと一緒に勉強してみると呑み込みの早さに驚きました。私が数学を教えているIさんにも変化が表れてきました。

Iさんは、JIN-KANA学習塾に通い始めた頃は、自宅学習をあまりしていませんでした。中2の途中から、勉強のやる気がなくなったそうです。数学に関しても、計算問題でつまづく箇所がたくさんありました。こうした中で私たちは、入試までの学習計画を立てることにしました。正直その時は、入試どころではなく、「学校の定期試験でいかに赤点を取らないようにするか」、「基礎からやり直さないと中3の範囲は教えられない」と限られた時間の中で何を教えればよいかわからない状況でした。数学の担当者で話し合った内容をもとにして、Iさんは毎回1コマ50分の中で10分間は計算問題を行い、残りの時間は学校の授業での宿題や復習を行うことにしました。計算問題は神奈川県の高校入試問題で毎年出題されているものに似た問題を宿題に出して、その丸付けや解説、確認の小テストに時間をあてました。

実際に始めて見て、最初の1か月ぐらいはスケジュール通りに進み、私が用意した教材と一緒に行いました。計算問題の宿題もちゃんとしてきました。しばらく経つとIさんの方から、自分が勉強したいものを持ってくるようになりました。学校の宿題も、自分の力で解けるものは解いてきて、わからなかったものに印をつけて持ってくるようになりました。この勉強に対する変化に驚き、私はとても嬉しかったことを覚えています。その後も、試験直しや苦手な問題の類題をやりたいて言ってくれて、Iさん自身が課題を見つけて行っています。

Iさんが自分から課題を見つけて行くようになったことを見て、私自身も励まされました。ただ1つ心配な点があります。Iさんは、とても真面目なので宿題は必ずやってきます。そのため、私が出している宿題が家での学習の負担になっていないかという点です。宿題の量を調節するため、学校での宿題や他の教科についても聞き、定期試験の間は宿題を出すのをやめました。また、用意した宿題プリントの範囲や小テストを行う日程を早めに言うようにして、Iさん自身が計画を立てやすいように工夫しました。今後もこの良い状態を続けられるように、Iさんの見つけた課題ができるような支援を行ってまいります。

## 大きな一歩

電子情報フロンティア学科3年  
勝俣恵梨奈

私は、JIN-KANA学習塾で10月の半ばからYさんの数学を担当しています。Yさんは、ノートの取り方が丁寧で、勉強にも前向きに取り組む生徒です。Yさんと勉強して思ったことは、一度解けた問題の類題を解いた時に、理解の出来ないところが少しでもあると思考が停止してしまい、ペンが進まなくなることです。理解が出来ている時の勉強の進み方はとても速いのですが、苦手な範囲の時は姿勢が崩れてペンを持たない時もあります。

JIN-KANA学習塾が始まってから最近までYさんのことで悩むことがありました。それは数学の提出物のワークを学校へ出さないということです。理由は、Yさんは空欄があるものは提出しないという考えを持っているからです。そのことはJIN-KANA学習塾の中で共有しましたが、すぐにアドバイザーの先生が動いてくださり、学校で途中でも課題を受け取ってもらえるようになりました。しかし、本人がなかなか変わらない日が続きました。ワークを解きながら、必要に応じて説明をしていくという流れを何回か繰り返して、11月の半分以上が過ぎました。けれど11月の後半に入った時にYさんから「ワークを学校に提出したので、今日はワークありません。」と言ってきました。話を聞くと、ワークは終わらせることは出来なかったようですが、「分からなかったところは全部赤で書いて出した」と言っていたので、Yさんの中で何かが変わってきたのだと思います。

Yさんの数学のワークの提出は周りの生徒から考えると小さな一歩だと思えますが、私はとても大きな一歩だと思えます。受験までまだまだやらなくてはならないことがたくさんありますが、この一歩から進んでいけると思うので、これからもサポートしていきたいと思えます。



## JIN-KANA学習塾を通して学んだこと

英語英文学科3年 田端真侑

JIN-KANA学習塾で活動を始めて4か月が経とうとしています。塾講師など、いわゆる勉強を教える経験が全くなかった私にとって最初はどのようにいい分からず不安に思う毎日でした。しかし、実際にJIN-KANA学習塾に来てくれる生徒達と一緒に学習しているうちにコミュニケーションがうまく図れるようになり、今では生徒と一緒に楽しく学習を進めています。

私が主に担当しているのは中学3年生のMさんです。彼女自身、英語は苦手だと言っていました。いざやってみようとするアルファベットの書き方から分かっていなかったことが分かりました。中学1年生の範囲からやり直すのは非常に根気が必要で、どうすればいいのか悩んでいたのですが、とても頑張り屋さんのMさんは2回目のJIN-KANA学習塾までに前回やったアルファベットに加えbe動詞まで完璧に覚えてきてくれました。どうやって復習したのか尋ねると、学習塾から帰って大好きなテレビを見るのを我慢してすぐに復習をやったこと、そして学校にも学習した問題集のコピーを持っていき、休み時間を使ってまで勉強していたことを話してくれました。彼女の行動から「英語が分かるようになりたい」という熱意が何ええました。彼女の頑張りのお陰もあり、12月に入ると中学1年生の英語の文法単元は全てマスターし、中学2年生の文法内容を進めることができている。

Mさんの今の学習状況を見ていると、問題をやっている中で間違えることも格段に少なくなり、間違っただとしても複雑な単語のスペルミスのみで、今まで学習してきた文法をよく理解し、着実な積み重ねをしてきたからこその結果だということがよく分かります。

私は、JIN-KANA学習塾を、学校で聞けないことを大学生のお兄さんお姉さんに気軽に聞ける場所にしたいと思っています。JIN-KANA学習塾を始めた当初、Mさんが「田端さんは、今さら学校で聞いたら怒られそうな英語の単語や発音を怒らずに優しく教えてくれるから嬉しい。遠慮せずに安心して聞ける」と言ってくれたことがあります。学校では今さら聞けないからと聞くチャンスが無いままどんどん授業が進んでいくという悪循環を、JIN-KANA学習塾でストップさせ、少しでも「分かった」という自信につなげられたらと考えています。

このように生徒と学習していると、教えている私たちも多くの大切なことを生徒から学んでいると感じます。私自身、Mさんと一緒に英語を学習する中で、英語が苦手な生徒に対しどのような方法で文法を教えるのが一番良いのかを考えるようになり、自分が教壇に立ったときに生かせるであろう貴重な経験を日々することができています。そのことに感謝し、私たちが、来てくれている生徒に何が出来るかを常に考えながらこれからも一緒に学習に取り組んでいきたいと思えます。

## 指導の前に人間関係を

英語英文学科科目等履修生 本田耕大

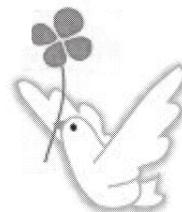
私は中学校の英語科教員を目指している。今までにも小学校で外国語活動のサポーターを3年間勤めたことはあったが、もっと教育について知りたい、中学校の生徒と関わりたいという思いが強かった。そのような時に、神大で学習塾を開くという話を耳にし、サポーターの一人として参加することになった次第である。

現在、私はYさんとIさんという二人の生徒を担当しているのだが、ここではYさんについて書かせて頂こうと思う。Yさんは神奈川区内の中学校に通う一般的な中学校三年生である。しかし、勉強よりも運動が好きなタイプであり、特に私が受け持っている英語に対してはひどく抵抗があるようだった。そのような状態で始めた英語指導はもちろんうまく行かず、始めの指導では50分間の中でYさんの発言は二言だけだった。小学校でのサポーター経験や昨年の5月に行った教育実習を通して、児童・生徒との関わりには人一倍自信のあった私であったが、これには正直心が折れそうになった。この時、支えとなってくれたのが、共にサポーターをしている仲間たちである。一般的な塾とは異なり、それまで勉強に対して意欲的な生徒の方が少ないJIN-KANA学習塾では当たり前とされていることが通用せず、どうすればよいかわからないことだらけである。しかし、同じ生徒に関わっている仲間同士で情報交換をし、同じ教科ごとで指導についてのアドバイスを出し合うことでその壁を乗り越えようと日々努力をしている。

Yさんについて言えば、まずは人間関係の構築に重点を置き、始めの5分間は雑談をすることに決めた。学校のことや趣味のことなどYさんのことを知る努力をした。そうした雑談を通して少しずつ関係を築きあげ、現在では指導中に自然と会話が行える関係にまで発展した。学習指導においては無理をさせず1年生からの基礎の定着を図らせることを決め、3か月で第1学年の学習範囲を終えることができた。

初めは英語に対する嫌悪感が伝わってくる学習姿勢であったYさんも、現在では自分から積極的に質問をしてきたり、勉強を始める5分前には毎回行っている単語テストのスペル練習を自発的に行うなど英語への気持ちがすこしずつ変わってきたように思える。私自身も常に向上心を持ち続け、英語科の仲間と共に単語リストの作成を行ったり、生徒が単語テスト結果をファイルできるようテスト用紙を作成するなど、日々努力を行っている。

JIN-KANA学習塾での経験はまだまだ浅いものかもしれないが、ここでしか体験できない多くのことを体験できている。特に学習指導と人間関係の因果関係を体験的に学べたことは今後の大きな財産となるだろう。これからもサポーター一丸となって協力し合い、生徒が皆高校受験に万全の態勢で挑めるよう頑張っていきたいと思う。



発行日：2014年2月15日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室

TEL：045-481-5661 (内線4228)

FAX：045-413-4154

E-mail：ttr-yakohama@kanagawa-u.ac.jp

UPL：<http://www.kanagawa-u.ac.jp/>

teacher\_training\_course/jysp



発行日  
2014年 2月15日

# ボランティア通信

## ～神奈川中学校編～

ボランティアで大切にしていること

法律学科4年 柏浩太

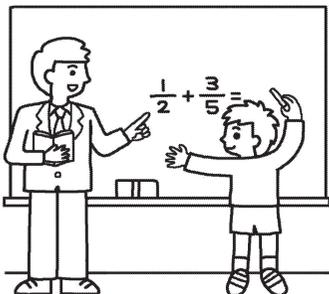
### 目次

#### [神奈川中学校]

ボランティアで大切にしていること 柏 浩太	1
1人1人と向き合う特別支援学級 郷 純之助	2
1年の活動で気づいたこと 嶋 由加里	2

#### [六角橋中学校]

学校ボランティアを通して学んだこと 下里 瑞希	3
教師に必要な声かけ 萩原 智也	3
教師の魅力を感じるボランティア 木下 貴雄	4
生徒に合った指導とは 中村 伸平	5
初めての学校ボランティア 佐野 史織	6



私は平成24年の10月から、神奈川中学校の個別支援級8・9・10組で学校ボランティアとして活動しています。活動の内容は、体育、数学、国語などの各教科で生徒とともに活動をしたり、生徒の授業中の学習の補助をしたりしています。専門教科のATとは異なり、学習の補助だけでなく授業中や休み時間での生徒の指導などの機会も多く、活動内容は幅広いように感じます。それだけに、生徒と多く関わりを持つことができ、関わり方についても深く考えることができる、ということも個別支援級での活動の特徴だと思います。

学校ボランティアの活動を開始してから1年が経過したこともあり、始めたころに比べて生徒に対してのコミュニケーションの取り方や指導の方法などに余裕が出てきたように思います。また、教育実習を経験したことで、ボランティアという立場ではなく教師という立場から生徒について考え接していくことの重要性も感じ、現在ではボランティア先の先生方の指導も参考にしながら教師として子どもたちのために何ができるかということ意識しています。

私がボランティアに参加するうえで大切にしていることがあります。それは、ボランティアに参加する際に「今日は〇〇君にこのような声かけをしてみる」「今日は生徒に対しての指導をこのように工夫してみる」というように毎回いくつかテーマを決めて活動するということです。このような取り組みを始めた理由としては、K君という生徒への対応の仕方にとっても困惑し、その生徒に対してどのような指導ができるか悩んだから、という事があります。K君は授業中に離席してしまう、大声で話してしまうといった行動が多く見られます。ただそれは、他人に迷惑をかけたり嫌なことをしたりするためではなく、感覚が非常に敏感である為に恐怖や緊張感を人一倍受けやすいということが、これまでの活動を通じて何となくわかってきました。そして、K君に対して何か良い指導方法はないか？と考えた時に、週一回という時間の中でできることは限られている、ならば、やるべきことを明確にして絞っていくことが大切なのではないかと思いました。実際に、このような心掛けをしながら活動を続けたところ、生徒が落ち着かなくなってきたり、予想外のことが起こったりした場合でも冷静に対応ができるようになってきました。また、そのような中で得た手ごたえや上手くいった指導などは自分の経験として、次回以降の活動にも生かす事ができました。現在では、その経験をもとに「あの場面での指導はもっとこうの方が良かった」というように色々な視点から自分が行った指導の振り返りを行い「次回の指導はこのように工夫してみよう」というように自分の中で試行錯誤しながら、自分に合った指導方法を探しています。

教師を目指す上で、指導力や考え方などまだまだ未熟なところはたくさんありますが、学校ボランティアという機会を通じて自分が不足している点を一つずつ見直しています。また、郷君や嶋さんをはじめ、同じように個別支援級でボランティアをしている人たちと悩みや理解を共有したり、他学校でATとして活動したりしている人たちの話を聞くことで、良い情報をたくさん得ることができています。このような関わりも大切にしながら、今後も充実したボランティア活動ができるように頑張っていきたいと思っています。

## 1人1人と向き合う特別支援学級

人間科学科4年 郷 純之助

2月から7月までの間初めての学校ボランティアで様々な経験をしました。教師側の視点に立って学校現場を見るということはほとんど初めてのことで不慣れなことが多く慣れることに一杯一杯なところがありました。そのため、夏休みが明けて後期が始まり9月から学校ボランティアの活動を再開するのにあたって、生徒1人1人としっかり向き合っていきたいと思い、「1人1人と向き合い、より生徒理解を深める」ことを目標として活動していくことにしました。

前期は火曜日にボランティアの活動をしていましたが後期は金曜日に活動することにしましたが、そこで気づいたことは週初めと週末では子供達の様子にも微妙な違いがあるということです。まず生徒たちから来る日が変わったことを指摘されました。生徒たちにとってはボランティアの学生が来ること自体には慣れていても、学生たちが来る曜日が変わるということが、私が思っていたよりも生徒たちの関心事であり、来る来ないをこちらが思っている以上に気にしていたりするなど、ボランティアの学生が生徒たちの学校生活にかなり影響を及ぼしているということに改めて実感しました。また、金曜日の翌日は土曜日で休みということで生徒との会話の内容も休日の過ごし方についての話や1週間のまとめのようなものが多く、より生徒の日常を知る機会が増えたように思います。活動を通し、前期と後期の活動で一番違いを感じたのは、生徒がより親しく接してくれるようになったことです。以前はだいたい警戒していたりときどき怖い生徒もいたのですが最近はそのようなことが少なくなりました。こういった変化はとても嬉しく、少しは信頼を得られたのかなと思っています。

1人1人と向き合うという目標に向けて、活動日において以前よりも生徒とのコミュニケーションを取ろうと努めています。生徒1人1人様々な個性があるなかで全員と同じようにコミュニケーションをとろうとすることは困難です。他のボランティア学生と話し合う機会があったときには、学生によって生徒の話方や接し方が変化しているということを知り、生徒への理解を深めるには自分と接しているときだけではなく、情報交換などを通して多角的に理解を深めるようにしていくべきだと思いました。

個別支援級とひとくくりと言っても様々な生徒が在籍しており、他の生徒の言動を受けて精神面が変化しやすかったりそうでなかったり、緊張しやすかったりストレスを感じやすかったりする生徒もいて先生方に相談して接し方を変化させてみたりと行くたびに試行錯誤の連続です。そのような中で、今後は引き続き目標に向けて努力するとともに、先生方の生徒指導方法なども学

び勉強していきたいと思えます。

## 1年の活動で気づいたこと

人間科学科2年 嶋 由加里

神奈川中学校の個別支援級(特別支援級)でATとしてボランティア活動を始めて1年が経った。昨年から接している2・3年生はもちろん、1年生ともかなり親しくなれた。朝、教室に入ると毎回生徒のほうから話しかけてくれるのだが、はじめは自分に起きた出来事を中心に話してくれていた生徒が、クラスのことや友達のことなど自分のこと以外の話もしてくれるようになった。このように生徒の変化を感じられるのは嬉しく、活動の楽しみの一つとなっている。

この1年で活動に対する姿勢も徐々に変化していった。活動を始めたころは学校という教育の現場をよく知ること、個別級の授業の仕組みを知ることに精一杯で、生徒との関係の上でも教師というよりお姉さんという立場であった。しかし、感情をうまくコントロールできない生徒や落ち着いて授業に取り組めない生徒と接することが増えていくうちに、ボランティアとはいえ教師という立場からどう接するべきなのかを深く考えるようになった。そうしていくうちに自分の課題が見えてきたように思える。活動を始めてから、何かを教えるときは生徒一人一人がどこまで理解しているかを把握することを常に意識するようになった。教室にいるのはみな何か障がいを抱えている生徒たちであり、授業の理解の仕方も一人一人かなりちがうのだ。困っている生徒の手助けをするとき、その生徒に合わせて理解しやすいように視覚的に表したり何か例えて自分なりに工夫して教えるのだが、それでも納得してもらえないときもある。その度に、もっと工夫しなければならないと感じる。また、生徒が間違ったことをしたときや友達に失礼なことを言ったとき、注意するがなぜ間違っているのかなぜ言っていないのかをわかるようにうまく説明できないこともある。困っている生徒の手助けの仕方や声のかけ方が今の課題だ。

1年ボランティアをやっただけでは、至らないところがまだまだ多い。ちがう曜日に活動している先輩の話や話を聞くと、自分には気づけなかった生徒の様子に気づいたり生徒との接し方に工夫があったりと、自分の活動の反省すべき点に気づかされる。しかし、それらの点をすぐに改善することは難しいので、先輩から教えてもらったように活動の日に課題に関連付けた目標を決めて一日取り組もうと思う。可能であれば来年、再来年と活動を続け、何か起きても臨機応変に対処できるようになりたい。

## ボランティア通信

## ～六角橋中学校編～

## 学校ボランティアを通して学んだこと

### 英語英文学科 4年 下里瑞希

私は一昨年の10月から、六角橋中学校のATとしてお世話になっています。以前は午前中のみでの活動でしたが、今年度からは毎週月曜日に一日活動をさせていただくことになり、英語の授業以外でも先生方や生徒と関わる機会が増え、とても充実した日々を過ごしています。ボランティアを初めてから1年が経った今では、担当しているクラスの生徒や他学年の生徒に声をかけられることも多くあり、回数を重ねるごとに生徒との距離が徐々に縮まりうれしく感じています。

ATの活動では、主に2年生の英語の授業で、机間巡視と英語が苦手な生徒への補助、生徒がノートやプリントに英語を書き込む際のスペルの間違いなどのチェックを行っています。特に2年生は、新出事項が多く、たくさん覚えなければならぬ文法事項や単語があります。わからないことがあると積極的に質問してくれる生徒もいますが、困っている生徒がいれば、こちらから声掛けを行います。説明をした際に、生徒たちが「わかった」「そういうことか」「ありがとう」と言ってくると少しでも生徒の役に立てて良かったとうれしい気持ちになります。

英語のAT以外でも、担当クラスの総合や道徳の授業に参加させていただくことがあります。この前、朝の打ち合わせの際に担任の先生から、今日の5時間目に総合学習の時間で職業体験の希望職業を決めるために、私のアルバイト経験などを交えて職業についてクラスで話してくれないかというお話をいただきました。今まで、ボランティアでみんなの前で話すという機会がほとんどなかったため、不安もありましたが、私の経験をどのように話せばわかりやすいか、職業体験につながる話とはどんなものか、というのを担任の先生に助言をいただきながら一生懸命考えました。そして、5時間目に話した際に、少し緊張していたのですが、みんなこちらを向いて私の話を聞いてくれたので、思っていたよりもうまく話すことができました。しかし、あとで考えてみると、少し一方的になっていた気がするので、もっとわかりやすく、生徒の発言を引き出しながら話せたらよかったなと反省しました。担任になると教科の授業以外でも生徒に話す機会がたくさんあると改めて感じました。今まで教科の授業を中心に考えていましたが、話す順序や話し方など、教師になるためにもっと話す力を身につけなければならないと感じました。

昨年の10月に母校での教育実習を終えた今、学校ボランティアの役割に改めて気づけたような気がします。今まで学んだことを生かして、これからも多くのことを吸収できるよう、残りのボランティア活動の時間を大切に過ごしていきたいと思っています。

## 教師に必要な声かけ

科目等履修生 萩原智也

私は毎週月曜日に六角橋中学校で学校ボランティアをしています。活動内容としては、全学年の保健体育の授業でのサポート、また個別級のクラスのサポート（主に体育がメイン）、部活動の指導です。

昨年4月から六角橋中学校に行き始めて、半年が経ち学校にも慣れてきた後期のはじめに、私は1つの目標を立てました。それは、「積極的に生徒に声をかけていく」です。なぜこの目標を立てたかというと、器械体操の授業時にうまく生徒に「声かけ」をすることができない1時間があったからです。私は実技の中では器械体操が得意ではなく、どう教えたらいいか悩んでいました。しかしその時、指導教諭の先生が悩んでいた私に「良いお手本にならなくてもいい。生徒たちの、できた・できないことに対して言葉をかけてあげることで、生徒たちはそれだけで嬉しいし、頑張りを見ていてくれる人がいるから頑張れるはずだよ」とアドバイスをしてくれました。

自分自身が実技ができることは最低条件でとても大切なことですが、そのことと同じくらい大切なのが、生徒たちのことを見て生徒にどれだけ、声をかけ、重要なポイントを伝えていくかだと気づきました。それは部活で教えているソフトテニスでも同じことでした。いくら私が良いボールを打てたとしても、生徒が良いボールを打つことができるようにならなくては自己満足で終わってしまいます。生徒たちに自分の知っている知識・技術だけを教えているだけで一方通行の指導だなと思いました。

そこで、授業でも部活でも先生方と授業前や練習前に打ち合わせをして、どのように練習を進めていくかを相談し、生徒の顔をよく見て、積極的に声をかけ、ナイスプレーや惜しいプレーを褒めて、生徒の声をよく聞くようにしました。大きな変化はまだありませんが、少しずつ生徒の困った反応に敏感になったような気がします。

良い見本になるだけでなく、生徒の状況をよ

く見て、積極的に声をかけ、子どもたちの可能性を引きだし、少しの変化にも気づけるような指導者になることが現場では必要なことだと感じました。

ボランティアを続けていく中で自分が保健体育の教員になるために必要なこと、足りないことがたくさん見つかります。そのように自分が勉強できている六角橋中学校の先生方、生徒たちにはとても感謝しています。この感謝の気持ちを忘れずこれからも、元氣よく楽しくボランティア活動に取り組み、後期の目標である「積極的に生徒に声をかけていく」術を身につけていきたいと思えます。

### 教師の魅力を感じるボランティア 電子情報フロンティア学科 3年 木下貴雄

私は、今年の春に迫った教育実習や教員採用試験へ向けた準備として、少しでも多く実際の現場での授業を、教える側の立場から観て学びたいという気持ちから中学校でのATを志望しました。私は数学の教員になることを志望していますが、先生方の授業の展開や生徒への発問の仕方など大変参考になる部分がたくさんあり、毎回多くのことを勉強させていただいています。

特に強く感じたことは、いかに生徒に考えさせるかが重要だということです。どの先生も、問題に対して生徒にただ単に正解となる答えを教えるだけでなく、「なぜその式になったか」などといったように答えを導き出した理由も生徒に答えさせていたことが印象に残っています。生徒の中には問題の答えはわかっている、自分の考えを言葉にすることが難しく感じているような子もいましたが、このような力は数学を理解するためだけでなく、社会生活の中でも必要になってくるのではないかと思います。私自身、ATをしていて、私のことを呼んで単純に答えだけを教えてくれることを求めてくる生徒も中にはいましたが、そういったときにも「どのように考えたらいいのか」というヒントだけを上手く教えられるようにすることを強く意識するようになりました。自分が与えたヒントによって生徒が理解してくれたときは、大きな喜びを感じました。これが教員としての醍醐味なのかもしれません。

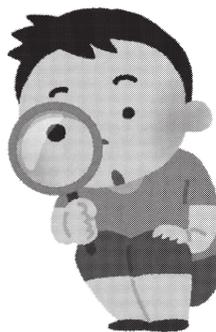
また、様々なクラスを観させていただいて気付いたことは、同じ中学生でも学年が上がると授業に取り組む姿勢が明らかに違うということです。中学生という年代の成長の著しさを感じるととも

に、こういった成長を見守っていきことができる教員という仕事に対する憧れがより強くなりました。

生徒とのコミュニケーションという意味でも貴重な体験をさせていただいています。1年生のクラスはほとんどが見慣れない大学生に興味津々といった様子で、生徒側からたくさん話しかけてくれましたが、2、3年生は生徒の輪の中に自分から入っていく必要がありました。こういった場面は教育実習でも想定されるので、現時点で経験できたことは非常に勉強になっていると感じています。

そして、六角橋中学校の生徒を見ていて一番素晴らしいと感じたことは、生徒が皆気持ちの良いあいさつができるということです。やはりあいさつがあるとその後のコミュニケーションがとりやすくなり、あいさつの大切さを逆に生徒から学ぶことになりました。中には学校以外で私に会ったときに挨拶をしてくれた生徒もいて、非常にうれしい気持ちになりました。

週1度のみ活動ですが、毎回新たな気付きがあり、とても有意義な時間を過ごさせていただいていると感じています。



生徒に合った指導とは  
情報システム創成学科 3年 中村伸平

私は、昨年10月から、毎週水曜日の午前中に六角橋中学校で数学のATとしてボランティアをさせていただいています。将来教師を目指すにあたり実際の現場では何が起きているのか、ATとして授業に入らせていただくことで多くのことを経験できると思い、このボランティアを始めました。活動内容としては、数学の授業の補助として机間巡視を行い生徒に声掛けをしたり、解らない問題を一緒に解くなどによって授業のサポートをさせていただいています。まだボランティアを始めてから日が浅く、毎回授業前は緊張しますが、六角橋中学校の学校の雰囲気はととてもよく、廊下ですれ違うと挨拶をしてくれる生徒も多く、教室の場所が分からない時に行き方を尋ねると丁寧に答えてくれたりと生徒の明るさにボランティアとして行っている私も元気をもらうことが多いです。

ATをさせていただいている中で心がけようとしていることは、その生徒にあった指導をするということです。例えば、生徒に分からない問題の解き方を説明する際、同じ説明の仕方をしていてもそれで理解できる生徒もいれば理解しきれていない生徒もいます。やはり生徒一人ひとりの特長を把握しその生徒に合った指導をすることが大切だし、そこから生徒との信頼関係を築くことができると考えます。

このような目標をたててボランティアをさせていただいていますが、生徒に合った指導というものの本質は自分の中で理解しきれていない部分もまだあります。加えて、ボランティアは週1回半日だけであり毎時間違うクラスの授業に入らせていただくのでコミュニケーションも十分とれていなく生徒の特長を理解することが難しいというのが現実です。そんな中でも自分の中で今思う、その生徒に合った指導が少しでもできるように、授業前の休み時間に生徒とコミュニケーションをとったり、教室の後ろから授業を見る中でクラスの雰囲気を感じたり、先生の動きを見ながら補助が必要そうな生徒を見つけるなどをしています。

生徒から質問を受けて解き方を教えるといった場面もよくありますが、毎回自分の力不足を感じ本当に理解してくれたか不安に思うし、「こういう教えかたの方が良かったかもしれない」と後悔することが多いです。やり直しはできない場所なので、毎回の反省を次回に活かせるようにして自分自身の成長に繋げたいと思います。今後はボランティアを通じ

て授業に参加させていただいたり、先生方とお話をさせていただいたりする中で、生徒に合った指導とはどういうものか、自分なりの答えを胸を張って言えるようにしていきたいと思います。



初めての学校ボランティア

人間科学科1年 佐野史織

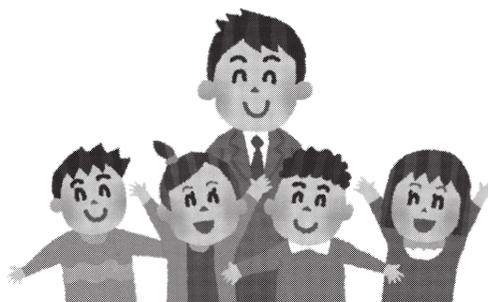
私は昨年の10月から、毎週木曜日の午前中、保健体育科のATとして六角橋中学校へ行かせていただいています。活動内容は、3年生の学級に入って担任の先生のサポートを行ったり、体育の授業を生徒と一緒に受け、体育を苦手としている生徒に手助けをしたり、見本を見せたりしています。また、個別支援級でも同様なことを行っています。週1回の午前中という短い時間ですが、学べることはとても多く、教師を目指す為に役立っています。

ATを始めた頃は、どんな風に生徒と接したらいいのか分からなく、生徒たちに声かけをすることができない時間がありました。先生方から「笑顔で話しかければ大丈夫！」というアドバイスをいただき、徐々にATというボランティアに慣れてきました。授業中に生徒たちを見て、授業で行っている種目を苦手としている生徒に声をかけ、アドバイスを伝えることが大切だと気づくことが出来ました。何回かボランティアに参加するうちに、生徒から「先生ここ教えてください！」ということと言われるようになり、生徒が理解できるように教えたりする事が多くなりました。

ボランティアを通して、体育の授業での教師の働きや指導法を学ぶことができます。教師が生徒に対し「どのようにしたら分かりやすく、楽しく授業に取り組んでくれるのか」というのを常に考えていて、学校教育の現場を間近で見ることができ、勉強になります。また、先生方は授業外でも生徒のことをしっかり見ているなど感じました。3年生は「高校受験」を控えているので、精神的に不安定な時期だと思います。生徒たちの少しの変化にも気づくことも大切だとわかりました。数年後、自分が教師となった時、どのようなところを気をつけて、授業をしていけばいいのか考えさせられます。

私は、教職課程について学び始めたばかりでまだわ

からないことの方が多いですが、ボランティア活動は、大学の授業では教わらないところも学ぶことができ、新たな発見や勉強になることがたくさんあります。これからも、大学とボランティアとの両立を目指し、このような貴重な体験を大切に、教職課程の勉強にも活かして頑張りたいです。まだまだ経験不足なところもあるので、これからも明るく元気に活動していきたいと思います。



**発行所：神奈川大学 教職課程支援室**

**TEL:045-481-5661(内線4228)**

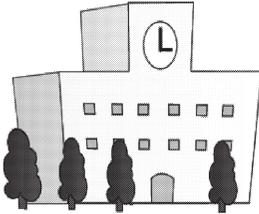
**FAX:045-413-4154**

**E-mail:htcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp**

**URL:http://www.kanagawa-u.ac.jp/Teacher\_training\_course/jysp/**

# ボランティア通信

## ～松本中学校&港中学校～



### \* 目次 \*

#### 【松本中学校】

授業や学校での 関わりから学んだこと 経済学部4年 渡辺定智	1
生徒との信頼関係を築き 学びやすい環境をつくる 工学部3年 安井大知	2
現場で感じた教師の難しさ 工学部3年 野辺沼籠市	2
「中学生の授業」とは 法学部2年 井上恵理	3

#### 【港中学校】

生徒のことを一番に 理解できる教師にいたい！ 経済学部4年 土屋萌子	4
港中学校で体験したこと 法学部4年 中島慎介	5
授業が始まる前の朝 工学部3年 宮崎晴夫	6

#### 授業や学級での関わりから学んだこと

経済学部4年 渡辺定智

私は松本中学校に、平成23年から2年半お世話になっています。最初は吹奏楽部が中心でした。今の1・2年生は彼らの入部時から自分がいるためか、すぐに自分を受け入れ、積極的に話しかけてくれます。一番付き合の長い3年生は、休みの日の練習で自分が指導するときなどに一所懸命に自分を支えてくれます。このような関係を築けたことは自分にとっての大きな財産となりました。そして今年からは、部活動の垣根を越えて「教科の指導」という本旨にもとづいてATとして活動させていただいています。学年や学校全体の規模で見ると、実に様々な生徒がいることに改めて驚かされました。そんな生徒たちへ適切なアプローチで授業を展開する先生方の姿から、教師としての資質について改めて考えさせられました。

部活動では気心知れた存在であっても、学級では初めて会う生徒がほとんどです。また休み時間や50分の授業の中でその全員と十分にコミュニケーションをとることは非常に難しいことでした。自分はそこから、「限られた時間の中でまずは自分のことを知ってもらうこと」を目標にして、積極的に話しかけたり生徒たち同士の会話に参加したりと工夫しました。その成果か、最近では授業で質問してくれたり、授業後に話しかけてくれる生徒が増えてきました。「金曜日の社会科は渡辺先生に会える！」と思ってもらえるように、もっと生徒にとって身近な存在を目指してコミュニケーションを重ねていきたいと思います。

そして一人ひとりの生徒はもちろん、クラスや学年の雰囲気をつかむことも心がけました。たとえ同じ範囲の授業であっても、クラスによって返ってくる反応は驚くほど違うもので、先生方はその都度アプローチを工夫されていました。また学年による違いも印象的でした。特に心に残った事例をあげてみます。ある1年生のクラスでは元気がよくどんどん意見が出ます。しかし調子に乗って関係のない意見を言う生徒もいます。先生は元気の良さを尊重しつつも「その話は今関係あるかな？」と切り返し、集中力が途切れない工夫をします。一方、学年が上がるとなかなか意見を出してくれません。先生は全員の意見を引き出すために、黒板に座席表を書き、そこに全員が意見を記入するように指示します。最終的に出された意見を関連付けたり対比することで、全員の意見を尊重する工夫がされていました。これらは経験のみならず、先生方の普段からの工夫や努力があつてこそだと痛感しました。

秋は体育祭や文化祭などのクラス単位の取り組みがたくさんありました。特に合唱コンクールに向けては各クラス一丸となって取り組む姿が印象的でした。自分もクラスの練習に参加させていただき、音楽の指導を行いました。その活動の最中先生方からいただいた言葉の中で「合唱の指導も大変。でも生徒がきちんと整列して、みんなが歌いだすところまでもっていくのが最も大変。担任の仕事はむしろこっち。」が非常に胸に刺さりました。自分の指示を親身に聴いてくれるクラスの雰囲気を当たり前と思つてはいけないうのだと痛感しました。

松本中学校でボランティアをさせていただける期間も残りわずかとなってきました。限られた時間の中でいかに自分を高めるかを第一に、一回一回を大切に取組んでいきたいと思つています。教壇に立つまでの課題は山積みです。研修はすでに始まっていると肝に銘じ、松本中学校での経験をより良いものにしていきます。

## 生徒との信頼関係を築き 学びやすい環境をつくる

工学部3年 安井大知

松本中学校のATとして、ボランティアさせていただいているうえで、私自身が掲げた目標は「生徒との信頼関係を築き学びやすい環境をつくる」ことです。私はATを始めてからまだ1ヶ月程しか活動していませんが、最近ではほとんどの時間を生徒と話して、授業の時間では授業に関する質問や、授業以外の時間では、授業内で終わらなかった問題の解説や、お互いの趣味や最近の話などをして盛り上がっています。

しかし、最初からこんなに多くの時間を生徒と会話できたわけではありませんでした。そのきっかけとなったのが大学の授業内で先輩の話聞いたことと、もう一つは神奈川大学附属中・高等学校での授業参観後の数学担当の先生との懇談会での話です。

先輩の話は先輩自身が教育実習で体験した実際の出来事だったのですが、それはある生徒のグループにどのように打ち解けたかという内容でした。打ち解けることができたのは共通の趣味があったことと自分自身がそのグループに実際に入っていき会話をしたからということでした。その話を聞いた私は翌週のATとして行ったときに実践してみました。その時はアニメの話題で盛り上がっているグループがいてそこに私が思い切って入っていくと、最初は話をしても全然会話が膨らまなかったけれど、そのような何気ない会話の中に生徒との信頼関係を築くきっかけがあることを身を持って体験することができました。

次に、懇談会での話の中で先生ははっきりとした心がけをすることが教師にとっては重要で、実際に先生は「生徒とのコミュニケーションを大切にしている」とおっしゃっていました。この心がけは一見すると単純に見えますがとても奥が深いことだと思います。なぜなら、黒板の板書がともきれいで、教え方が上手な先生がいたとしても、そこに生徒とのコミュニケーションがなければお互いの意思の交換ができないことになり、決して良い授業にはならないと思うからです。しかし、上記にあるように、日常の何気ない会話から生まれる生徒と教師との信頼関係は授業の雰囲気をよくするだけでなく、生徒自身がその授業に向かう姿勢も変わるのではないかと思います。

松本中学校のあるクラスには授業中によく寝ている生徒がいます。ATをやり始めた時はほとんど話を聞いてくれませんが、最近は寝ているときに注意するのではなく、「どうして眠いのか」という問いかけをして眠気を覚まさ

せることを心がけるようにしています。これにより、今では一番と言っていいほど仲良くなることができています。

最後に、私自身はまだまだ未熟で学ぶことがたくさんありますが、話の冒頭にも述べたように「生徒との信頼関係を築き学びやすい環境をつくる」ということを念頭に置いて、これからもATとしてできる最善のことを積極的に取り組んでいきたいと思えます。



## 現場で感じた教師の難しさ

工学部3年 野辺沼龍市

私は毎週月曜日、松本中学校で数学のAT(アシスタントティーチャー)をさせていただいています。松本中学校は生徒一人ひとりがとても元気よく、すれ違う時に必ず挨拶してくれる明るい生徒の多い活発的な学校です。

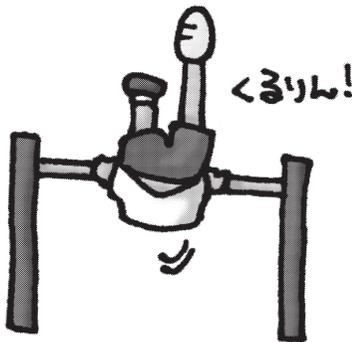
活動内容は数学の授業の補助を行っています。具体的には、先生が説明している時は後ろで生徒の様子を見て、計算などの演習問題の時に巡回しながら解き方が分からない生徒に対してアドバイスしたりしています。学年の指定はありません。先生によっては、20分程度の授業をやらせてもらえることもあります。

私はこのボランティアを始めたばかりで経験は浅く未熟ですが、貴重な経験をさせてもらっています。校長先生からは「生徒にとって為になるような指導をして、その結果良い経験を得られるよう心がけるように」と言われました。

私の目標は、生徒から気軽に声をかけてもらえるようなATを目指すことで、その為に今は生徒との距離を少しでも縮められるように心がけています。生徒から声をかけてくれることもあります。基本は自分から生徒に関わっていかねばあまり相手にされません。特に授業中はそのように感じました。例えば、私が巡回して見て回ると生徒はノートを隠すような仕草をとってきたり、手が止まっている生徒に対して、「大丈夫？」と声をかけても「大丈夫です」と返答されたり、まだ生徒との距離があるように感じました。授業後、その授業の担当の先生にどうしたら良いのか尋ねたところ、「質問の仕方を変える必要がある」と言われ、いくつか例をあげて頂きました。それらを参考にしながら自分なりに模索している状態です。だから、今は生徒との距離を縮められるように自分から積極的に関わっていくことを継続していると思っています。

ボランティア活動を行っていて感じたことは、現場に立つと一人の教師として先生からも生徒からも見られるということです。活動中は常に野辺沼先生と呼ばれ責任感をものすごく感じますし、今の私にはどこか重く感じます。また、社会の場でもあるので人間関係の構築は必須で、生徒だけでなく教師間での人間関係も教師としての仕事をやる上で必要だと感じました。したがって、今後は数学を担当されている先生だけでなく、他教科の先生とも関わりを持つようになりたいと思います。

教師を目指す上で良い緊張感の中でやらせて頂いており、精神面も鍛えられます。先生方は授業が終わったあとにアドバイスをくださるのでとても為になります。先生方の話をよく聞き、自分ができることを少しでも増やせるようにし、目標及び、校長先生からの言葉を少しでも早く達成していけるように今後も頑張りたいと考えています。



## 「中学生の授業」とは

### 法学部2年 井上恵理

私は社会科のATとして毎週木曜日に松本中学校へ行かせていただいています。私がATを始めたきっかけは、中学校では「どんな授業をしているのか」を、大学生になって教員を目指している今の目線で見てみたいと思ったからです。履修している授業で模擬授業があっても、自分が中学生だった頃の授業風景をなかなか思い出せず、「中学校の授業」を作り上げることが出来ないのです。実際の授業を見て肌で感じることで「中学校の授業」とは何かを学ぶためにATを続けてます。

ATを始めてから2か月ほどしか経っていないのですが、それでも学んだことは沢山あります。生徒との接し方、姿勢、目線等実際に働いている先生を間近で見ているとその行動一つひとつに「先生」が詰まっており、全てが勉強になります。

多くの授業の中で特に印象に残っている授業は、2年生の授業です。この時期の2年生は北海道から九州の各地域について学習します。私が中学生の時には板書中心の授業だったと思います。しかし松本中学校では、プリント中心の授業展開でした。プリント中心と言っても、問題を解くのではなく、自分でプリントを作り上げるというものです。例えば、関東地方がそのプリントのテーマだとすると、プリントの中心に関東の白地図が描いてあり、周りに穴埋めや自由に文章を書き込めるスペースがあります。つまり、ほとんど何も書いていないのです。私は、「これだと生徒は何を書けば良いか分からずに結局何も書けないのではないだろうか」と思っていました。しかし実際は、生徒達は先生が何も助言せずとも驚くほどの集中力で、プリントの白い部分が見えなくなる程びっしりと沢山のことを書き込んでいました。それも、色鉛筆や色ペンを使い、教科書や地図帳を見ながら川・山の名前、産業やその地域の特色など、非常に細かい部分まで生徒全員がそれぞれ工夫しながら書きこんでいました。このプリント作業は毎回班で行われています。理由を聞くと、「多少の私語が出てしまうけど、班で作業することで、お互いの上手な部分を吸収し合えるから」とのことでした。私にとってそれは衝撃的な言葉でした。私はこの時まで「どうやったら生徒にとって分かりやすい授業が出来るか」という「教師の教え方」についてしか考えていませんでした。しかし先生の言葉で、教師が教えるだけが授業ではない、授業は生徒達がお互いに学び合い、成長し合う場でもあるのだと気付かされました。先生は生徒たちの自主性

を最大限尊重し、生徒たちが自ら考え、工夫し、より成長したいと思わせる場を作っているのだと知りました。

つまり、私が数回のATで学んだ「中学校の授業」とは、「生徒たち自身で自立できるように成長する機会を設ける場」です。教師はあくまで補助であり、生徒が主体に動いてこそ「授業」であると思います。「中学校の授業」についてこれからATとして活動していく中で、より学んでいきたいです。

## 港中学校



生徒のことを一番に

理解できる教師になりたい!

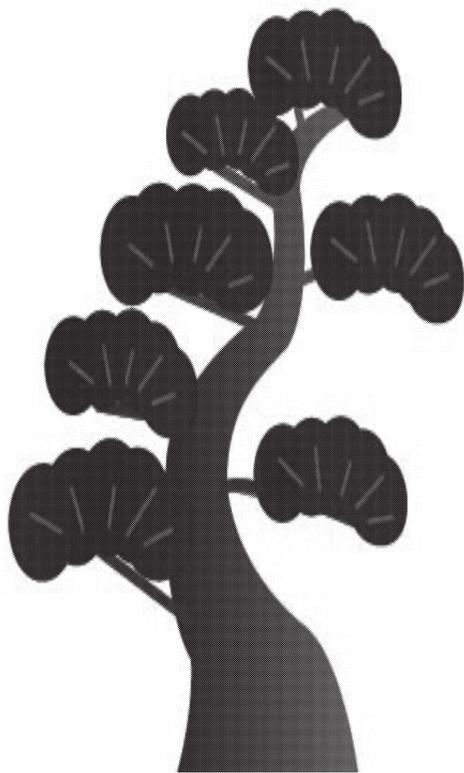
経済学部4年 土屋萌子

今学期で、港中学校にてボランティアをさせていただいて2年が経ちました。港中学校は、中華街の入り口に位置しており、みなとみらい地区からも近く大都会の中にある中学校です。そして先生から伺った話では、全校生徒の4分の1は外国につながるのある生徒であり、その国の数は10カ国以上だそうです。私はそのような中学校の国際教室という、生徒が教室で国語の授業などの時にここへきて、日本語の勉強をしたり、教科補習の個別授業を受けていたりする教室で先生の補助としてボランティアをさせていただいています。

この国際教室は、授業中は生徒が2~4人程しかいないのですが、休み時間になるとたくさんの方がここに集まり、全員が中国語で会話をします。その様子は、まるで海外にいるようで、ボランティアを始めた頃はとても驚きました。そう思うと、外国から来たばかりの生徒も、知らない言葉が飛び交う教室では安心できないけれど、この国際教室が学校の中で、自分の言葉で自分の気持ちを表現できる唯一の安心できる場所なのだと思います。

週1回のボランティアをしていく上で、私は生徒全員とたくさんコミュニケーションをとっていくことを目標にしました。生徒の中には、日本語がわかる生徒とわからない生徒がいます。前者の日本語がわかる生徒は、いろいろなことを話してくれるようになりましたが、後者の日本語がわからない生徒はコミュニケーションをとることが難しいと感じています。しかし、言葉は通じなくても、絵や漢字を書いて表現することや、歌うことなどでコミュニケーションをとれることができました。これからのボランティアの中で、日本語が通じない生徒とたくさんコミュニケーション

## 松本中学校



をとっていくにはどうしたらよいのか考え、もっと生徒のことを理解していきたいと思っています。

また、ボランティアをされていて嬉しいことがありました。私は今年度教育実習があり、ボランティアを長い間お休みしていました。久しぶりに復帰した時、生徒は私の事など忘れてしまっているのではないだろうか、少し不安でしたが、生徒から「あ、先生だ！」や、「久しぶりですね、元気でしたか？」と声をかけてくれました。そのことがとても嬉しく、少しでも生徒の中で記憶に残ることができているのだなと実感しました。生徒の一言は、私に大きな自信ともっと頑張ろうという気持ちを与えてくれました。

最後に、国際教室に関わっている先生方を毎週見ている、生徒一人ひとりを理解しようとしていることがよくわかります。私もそのような先生方の様子を見て、たくさんのことを吸収し、将来はどのような生徒に対してもコミュニケーションをたくさん取りたいと思います。そして、生徒一人ひとりのことを一番に理解できる教師になり、生徒全員が笑顔で学校生活を送ることができるようにしていきたいと考えています。



## 港中学校で体験したこと

### 法学部4年 中島慎介

今年度の10月から、私は港中学校でボランティアとして学習支援をしています。港中学校の周辺には、中華街や山下公園など多くの観光地があります。生徒たちの様子を見ると、全校生徒数の4分の1が外国につながる生徒であり、私はそれに驚きました。私が港中学校を訪れたとき、中国語で話している生徒たちを見かけました。そのとき生徒たちとどうやってうまく接していけばよいのか、私は少し不安を感じました。そこで、外国につながる生徒たちへの支援の仕方を理解し身につけていくことを目標として、港中学校での学校ボランティアを始めました。

初めて国際教室でボランティアをしたのは、10月10日に中学1年生の生徒に国語の音読指導を行ったときです。授業が始まる前、私は生徒に簡単な自己紹介をしてお互いのコミュニケーションを取りました。しかしその生徒は恥ずかしがりやで、声が小さく聞き取れない部分がありました。そのことから生徒は日本語をあまり読めず、自信を持っていないことが分かりました。私は、生徒に大きい声を出して読むよう優しく声をかけました。そのとき生徒は嬉しそうな顔になり、私は生徒と一緒に文章の音読練習をしました。時々、生徒から「この漢字は何?」「それ、何?」などと聞かれることもありました。私は生徒に丁寧に優しく説明しました。このようにして生徒とやり取りを行うことで、お互いの関係を少しずつ築くことができるようになりました。

ボランティア活動を行っている中で苦労したことは、休み時間中に国際教室に入る生徒たちへの対応です。生徒たちが国際教室に入ると、生徒たちは中国語(母国語)で話し始めました。私は中国語で何と言っているのか、生徒たちが何について話しているのかが分からなくなりました。また中国伝統の遊びをしている生徒や、友達と会話を弾ませている生徒たちにどうやって声をかけてうまく接していこうかが分からず、戸惑うところも多かったです。これは休み時間中、外国につながる生徒とコミュニケーションが取れていないからだ気がつきました。

このように私は生徒たちと積極的に接していくためには、生徒たちと一緒に遊んだり教科を学んだり、さらにそれぞれの国の伝統遊び・文化・母国語と触れ合ったりして、お互いの関係を知ることが必要であると感じました。今までの活動体験を活かして、さらに生徒たちへの学習支援に取り組んでいきたいです。

## 授業が始まる前の朝

工学部3年 宮崎晴夫

わたしは今年度の秋から再び港中学校の国際教室でボランティア活動をしています。2年ほど前の秋から春にかけて活動をしていました。国際教室とは外国籍の生徒や日本に来たばかりの生徒、海外とつながりがある生徒と共に少人数で学習を行う教室です。日本に来たばかりで、日本語の理解がまだできていない生徒もこの教室では珍しくありません。わたしは、このような生徒に日本語を教えることや教科の学習を補う活動をしています。少人数ということもあり、一人ひとりの生徒がどのように学ぶかを身近で見ることができる本体験はとても貴重であると感じています。わたしの専攻は数学であり、国際教室が開放されていないときは普通学級の数学の授業で参観、補助をしています。

わたしの普段の活動で上記に記載されていない内容があります。それがあいさつ運動です。校門の前に週ごとに決められた生徒と一緒に立ち、登校する生徒に対してあいさつをする運動です。朝とは思えないほど気持ちよくあいさつしてくれる生徒もいれば、あいさつを返してくれない生徒がいるのも事実です。一人でも多くの生徒が気持ちよく朝を迎えられるように、わたしも明るく元気よく大きな声であいさつをするように心がけています。

わたしがボランティアを始めた時期は、合唱コンクールの朝練が行われた時期でした。毎週行くたびに学校中に響き渡る歌声を聞くのが心地よかったです。残念ながら、本番を見に行くことはできませんでしたが、本番二日前の朝は

とても完成度の高い合唱が校舎内の各所から聞こえていました。これはクラスメイト全員が集まることができる朝の時間で練習を重ねたことも大きく影響しているとおわたしは思いました。

合唱コンクールが終わっても、早く登校する生徒は少なくありません。これは、部活動の朝練があるからです。わたしが登校するとき、校庭では元気にキャッチボールをする野球部の生徒、剣道場から響く竹刀がぶつかり合う音、体育館からは体育館シューズと床がこすれる音などあらゆる場所で朝練が行われていることがわかります。部活動を朝からすることは、大会などで結果を残すために重要なことだとわたしは自身の経験から知っています。また、朝練に参加した生徒が所属する学級の授業に参観へ行つた際、とても積極的に授業に取り組んでいたことも朝から体を動かしているからではないかと思いました。

この活動を始めて、わたしの意識が一番変わった内容としては朝の授業が始まる前の時間の使い方の重要さです。朝の早い時間から学校生活が始まることで、気持ちよく授業に臨めることや朝の時間でコミュニケーションをとることで、充実した学校生活を送れるという実例の中で活動を行えていることがとても嬉しいことだとわたしは感じています。



**発行日:2014年2月15日**

**発行所:教職課程支援室**

**TEL:045-481-5661(内線4228)**

**FAX:045-413-4154**

**E-mail: t+cr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp**

**URL: <http://www.kanagawa-u.ac.jp/>**

**[teacher\\_training\\_course/jysp/](http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/)**

発行日 2014年2月15日

# 学校ボランティア通信

## ～栗田谷中学校&老松中学校～

### 目次

#### 栗田谷中学校

自治行政学科 4年 早川真央 1  
「生徒へのメッセージ」

英語英文学科 4年 室井博 2  
「アシスタントティーチャーとして」

英語英文学科 4年 安田喜子 3  
「ATとして生徒と関わる中で」

英語英文学科 3年 徳永上総 3  
「教師・ATとしての役割」

人間科学科 3年 野崎貴裕 4  
「ATで学び得たこと」

人間科学科 2年 矢島芽以 5  
「個別支援学級の生徒と過ごして」

#### 老松中学校

人間科学科 4年 青木友美 6  
「生徒が別室で過ごすということ」

### 「生徒へのメッセージ」

#### 自治行政学科 4年 早川真央

栗田谷中学校で学校ボランティアの活動を始めてから、約1年半が経ちました。週に1日だけの活動ですが、生徒との関わりや社会を始めとする様々な教科の授業に入らせて頂くことで多くの学びを得ています。これまでの活動を振り返って、先生方の姿から学んだことやこの経験を通して感じる自身のこれからの課題を述べていきたいと思います。

これまで生徒との関わりを大切にすることはもちろん、現場での先生の動きや対応の仕方を見て学ぶことを意識してきました。しかし教育実習を終えて、自分が学級担任であったら生徒に何をどのように伝えるだろうか、というまた新たな視点を加えての活動を心掛けています。たとえば、道徳の授業において「いじめ」に関する内容を考えたとき、用意されたワークシートを進めながら最後にどんな言葉をかけることができるだろうかと考えました。そこで、自分自身が「いじめ」に対してどのように捉えているのか明確しておくべきだということ、また先生がお話された内容から「綺麗事を並べるのでなく、素直な気持ちを伝えることが何より重要である」と気が付きました。先生のお話の中には必ず生徒に対してこういう人になってほしい、というメッセージがあります。私には、この思いが足りないのだと感じました。「喜びや悲しみを共に感じるができる人になってほしい」、「いじめという手段を取るような小さい人間になってほしくない」などと、目の前の生徒がこのような人になってほしいという思いを伝えていける教師になりたいと思います。学校行事や日々の学校生活の中で、生徒の前でこのような話をする機会はたくさんあります。常に生徒の成長を考えながら、生徒と関わっていくことを意識していきたいと思います。

また、道徳の授業の最後に「先生もいじめの解決方法はわかりません。でも、もしこのクラスでいじめがあるようならば、私は担任として共に解決方法を考え、粘り強く向き合っていくつもりです。」という先生のお話がありました。生徒の成長を望むと同時に、担任としての役割と責任を果たすことを約束し、日々の行動で示すことによって生徒との信頼関係が築かれるのではないかと感じました。このように先生の言葉や姿から学び、私も教師として、だれもが安心して豊かな学校生活を送ることができる環境をつくれるよう努力したいと思います。

このボランティアを通して、教師自身の言葉や姿勢が生徒に大きな影響を与えることを再確認しました。残りの大学生活、栗田谷中学校のプロの先生方や生徒との関わりから、常に学ぶ謙虚な姿勢を忘れず、理想の教師に向けて精進していきたいと思います。



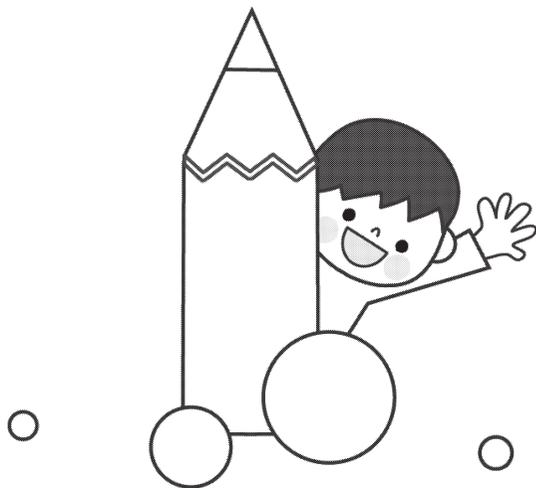
## アシスタントティーチャーとして 英語英文学科 4年 室井 博

私は昨年2月から毎週木曜日に栗田谷中学校でアシスタントティーチャー(AT)として大変お世話になっています。廊下ですれ違った時や授業のATとして教室に入った時に「あ、室井先生だ！」と生徒に声をかけてもらうことが多くなり、毎週嬉しい気持ちになります。最近では私自身が生徒の名前を覚えていることも多くなり、以前よりも生徒たちの世界に入っていきやすくなったと実感しています。また先生方にもよくご指導やアドバイスをさせていただき、何も学ばない日はありません。こうした中で私はATとしてどうすれば生徒たちや先生方の役に立つことができるかなどについて考えるようになりました。

以上のことを考える上で私はある経験をしました。それはある日の国語の授業でした。その日は生徒たちが調べてきたことをプリントにまとめるという授業で、生徒たちはその作業を行っていました。生徒たちは先生の所に質問をしに行ったり、友達とどうやってプリントにまとめるかについて相談したりするなど、決して静かとは言えませんが、先生が注意をするほどではありませんでした。しかし、その中である生徒が作業もせず他の生徒に向かって消しゴムを投げたり、大声で話したりするといったことが目につきました。先生は他の生徒の対応をされていて、気が付いていないようでしたので私がその生徒に話しかけました。私が「どうしたの？」と言うと生徒は「プリントを失くして先生に言ったんだけど、無視された。」と言ったのです。そこで私は「ちゃんと先生に言ったの？先生は無視したんじゃないの？もう一回言いに行ってきた。」と言いました。案の定、先生はその生徒を無視したのではなく、他の生徒と作業の方法について話をされていて聞こえなかっただけなのでした。

この経験から私が学んだことは2つあります。1つ目は、生徒を表面だけ見て判断してはいけないということです。正直言って、私はこの生徒のふざけている行動を見た時に、単に授業態度が悪い生徒だと誤った見方をしていました。しかし、実際にはこの生徒は非常に真面目な生徒で、先生から新しいプリントをもらおうと作業に集中し、授業中にプリントを完成させたのです。生徒を見る時には、単に言動だけをとって判断するのは

なく、なぜそのような言動をするに至ったのかという背景までを理解する必要があると痛感しました。2つ目にATはきちんと授業の補助になるべきであるということです。これはATなのだから当たり前だと思いますが、自分は本当に授業で補助をしているのか、もしかしたら単に授業を見学しているだけではないのかと時々不安になることがあります。先生は体が1つですし、今回のように他の生徒の対応をしていると、全体に意識がいくことは困難になります。こうした状況の時に言われなくてもすばやく察知し、その補助に回るのがATの役割だと考えます。そういった意味で今回の経験は、私のATとしての数少ない成功体験の1つになったと思います。言われてやるのは当たり前です。しかし、先生方がご多忙であるということを考えれば、言われなくても授業のどの部分で自分が補助できるかを常に考え、行動に移すことでより生徒や先生方の役に立つのではないかと思います。そして、ここで大切になるのは先生方にきちんと報告・連絡・相談をすることです。こうした段階をきちんと踏むことで、ATとしての活動がより円滑に、そして充実したものになると考えます。私はもう4年生なので、ボランティアをする日数も残り少なくなってきましたが、生徒や先生方の役に立つために自分は何が出来るのか、また何をすべきなのかを常に考え、残りの貴重なボランティア活動を今までの感謝の気持ちを込めて行っていきたいです。



## ATとして生徒と関わる中で 英語英文学科 4年 安田喜子

栗田谷中学校にATとして行かせて頂いて、ちょうど1年が経ちました。後期に入り、担当の先生のご配慮により英語の授業を主に見させていただき、それ以外の時間は他の教科の授業や個別支援のクラスに行かせて頂いています。後期からは「一人ひとりの生徒に合わせたサポート」を目標にしてきました。そのためここでは、これに沿って頑張ってきたことと、これからもっと積極的に取り組んでいこうと思ったことを書いていきたいと思っています。

さて、ボランティアの目標を「一人ひとりの生徒に合わせたサポート」としましたが、それはどのようなサポートを言うのでしょうか。わたしは「生徒理解をもとにしたサポート」がいちばん大切だと思いました。生徒が授業に集中していないとき、それにはたいい理由があります。生徒たち本人は初めこそ「面倒くさい」しか言いませんが、関係性を築いていくなかでその原因がはっきりと見えてくる場合があります。それは生活上の不安や、悩み、学習内容についての不安など様々で、それを糸口サポートの手立てを考えていくように心がけました。例えば英語の授業の時こんなことがありました。

英語の時間にはテキストを調べて単語を書く時間があります。しかしその時間になると、机に突っ伏してしまうような生徒がいました。初めこそ「面倒くさい」しか言いませんでしたが、様子を見ていると、その子は教科書を持っていないだけで、そのほかの時間は至って活発に授業を受けていました。そのため、単語を調べる時間には辞書を2冊用意して一緒に調べるようにしてみました。すると、次からは突っ伏すことなく、辞書が運ばれるのを待つようになっていました。生徒を授業に集中させるとき、私はいつも彼らへの動機づけにばかり気がいってしまいがちだったため、この経験から新しい学びを得ることができました。

これからの課題は、わたしが関わっていく中で少しでも多くの生徒が継続して授業に集中できるように援助することです。クラスの中には、過度に自己主張する中で自己存在感を確認している生徒がいます。そのため、何かしらのきっかけを与えることで少しずつも授業に集中させ、自己有用感や自己存在感を感じられるようにしたいと考えています。「頑張った、集中して取り組めた」

経験から、ひいては「授業が楽しかった」と思える経験を増やしてあげて、自然と学習への主体的態度が身につくようにすることが目標です。そのためにも「なぜこのような働きかけをしたのか」と逐一自分の行動を緻密に内省し、責任を持った行動を取るようにしたいです。

このように、日々生徒とうまくいかなかったりうまくいったりの繰り返しです。そして、栗田谷中学校の先生方や生徒からはたくさんの「気づき」をいただいています。ATとして栗田谷中学校へ通えるのも残り少なくなってきましたが、常にアンテナを張りながら先生方や生徒たちと接し、少しでも多くのこと吸収し、栗田谷中学校でのかけがえのない経験を糧に、これからも目標に向かって邁進していきたいと思っています。

## 教師・ATの役割 —生徒の成長に寄り添って— 英語英文学科 3年 徳永上総

「おはようございます！」と元気の良い挨拶は何度聞いても、私の心を暖かくして「今日も一日がんばろう」という気にさせてくれます。どんなに辛いことがあっても、どんなに疲れていても、その一言でまた頑張れるのです。私が栗田谷中学校でAT(アシスタント・ティーチャー)としての活動を始めて、早いもので1年が過ぎようとしています。今振り返ると本当にあっという間で、めまぐるしい日々でしたが、栗田谷中学校で学び、感じたものはひとつひとつ重みがあるのです。

大学生にもなると1年という時間をそれほど大切に感じませんが、中学生という人生の最も密度の濃い時間を過ごす生徒たちにしてみれば、1年という時間は非常に貴重なものです。私が栗田谷中学校の生徒たちと触れ合い、共に生活する中で感じたことは「成長」であり、中学生の心と身体の成長の速度に大変驚かされる毎日です。4月時点で私より背の低かった生徒が今では私を越している、なんてこともあります。生徒の成長に寄り添い、すぐ間で体感することができる。こんな経験を今からできている私は幸せ者です。しかしやはり、中学生です。良いものにも、悪いものにも影響を受けやすい時期でしょう。その点、教師という職業は常に生徒に見られているという意識が重要であることも学びました。

教師が面倒くさがったり、嫌な顔をしたりすると生徒はすぐにそれを感じ取ります。そのようなことが積み重なると信頼関係に影響し、よりよい関係を築くことができなくなってしまいます。それは教師にのみならず、学校の中にいる一人の大人としてのATも同じです。単に勉強と社会のルールを教えるだけでなく、生徒に人生の先輩として模範となるようなよりよい姿を見せ、生徒の人間としての豊かさを培うことも教師、そして学校現場にいる一人の大人としての私たちATの役目だと考えるようになりました。

もうすぐ約1年に渡って関わり合ってきた3年生が卒業し、春には新1年生が期待に胸を膨らませながら、入学してきます。「自分は常に見られている」そして「生徒たちの模範でいたい」ということを意識してこれからも栗田谷中学校の生徒たちと関わり合っていきたいと思います。

## ATで学び得たこと

人間科学科 3年 野崎貴裕

私は昨年四月から毎週火曜日にATとして栗田谷中学校に通っています。午前中のみ活動と短い時間ではありますが、通常ならばなかなか入ることができない学校の中で生徒とかかわることや、先生の授業を聞けることは貴重な体験で、毎回新しい発見があります。授業だけではなく休み時間の過ごし方や朝会、合唱祭の練習など様々な場面の生徒たちの様子を見ることができているのも、学校について学びたい機会になっています。

栗田谷中学校に通い始めたばかりの頃は、生徒に対してどのように声をかけていいのわからず、なかなかATとしての役割を果たせているという実感を得ることができませんでした。しかし、生徒の授業中の様子を観察するなど少しずつではありますが経験を積み、声のかけ方やタイミング、コミュニケーションの取り方が改善されてきたように思います。例えば、先生が教科書やノートを出すよう指示した際に、以前であればすぐに声をかけて注意を促していましたが、生徒は行動に移すのが遅いだけであり、自ら教科書やノートを出して授業に参加することに気が付きました。逆に声をかけることによって生徒のやる気や集中力をそいでしまう場面もあったので、最近ではできるだけ生徒が自発的に行動

し始めるまで待って、授業が始まってノートや教科書を開かない場合には声をかけるようにしています。しかし、それでもなかなか授業に参加しない生徒もいるので、対応の仕方を工夫してしっかり授業を受けられるようにしていきたいです。

ATとして学校の授業に参加することの意義は、生徒とかかわる経験ができるだけでなく、先生の授業を聞いて学べることもあげられます。大学の模擬授業でも他の大学生が考案した授業を受けており、学ぶことも多いですが、実際に現場でプロとして教えている先生方の授業はそれ以上に参考になります。地理の授業であれば、地名だけでなく、それと一緒に場所も覚えさせることが授業においていかに重要な要素であるか学びました。また授業の進行で疑問に感じた箇所や、現在の社会情勢によって授業で扱うテーマにどのような影響がでるかなど、専門的な質問に対しても丁寧に答えてくださるので、非常に勉強になっています。また社会だけでなく、英語や数学などの授業にも参加し、社会の授業との組み立てや進め方の違いなどを感じると同時に、中学生に分かりやすく説明する方法について学ぶことができています。

このように、ATとして活動することで教師に必要な様々な知識や行動を少しずつ身につけています。失敗することも多く、教師という職業が非常に難しいと改めて感じることもありますが、それでも教師になりたいと思います。ATの活動を通じて学び得たことを活かし、生徒に信頼される教師を目指していきたいです。





## 個別支援学級の生徒と過ごして 人間科学科 3年 矢島芽衣

初めて生徒に会った緊張感もなくなり、私はようやく、生徒と過ごす学校生活に慣れてきたと思います。個別支援学級では様々な体験をさせていただき、多くを学ぶことが出来ました。今回はボランティアを通して学んだ3点について紹介したいと思います。

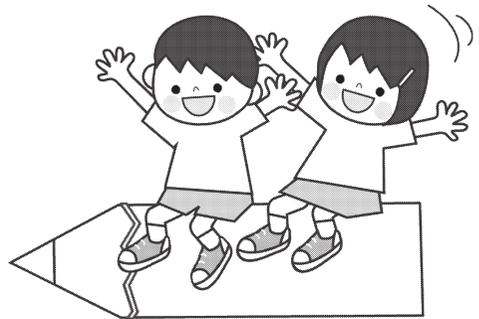
第一に、私の基準で生徒の出来る・出来ないを決めないことです。もちろん何かしらのハンディキャップを抱える生徒にとって得意・不得意はもちろんあり、その生徒の発達段階に対して配慮が必要なものもあります。しかし、それを私が一側面だけを見て、出来ないと判断してはいけないということです。例えばこのようなことがありました。その授業は工作関係の授業で、自分で線を引き、その上をはさみで切るという課題があり、私は線を見ているけれど、大幅にずれて切ってしまう生徒に対し、この課題は無理だろうと感じていました。しかし、担当の先生が、生徒の書いた線の上から赤ペンでなぞり、その上を切るように指示する一たっただけのことで、すぐに生徒は出来るようになっていました。このことから、ある課題が出来ないから別の課題をやらせるのではなく、こちらのアプローチを生徒によって変え、その生徒が一番わかりやすい指導方法を使い、成功させることが重要だと感じました。

第二に、褒めるということは重要ですが、言葉をより具体的にし、褒められたことが生徒にしっかり

と伝わるようにするという事です。よくある褒め言葉「よくできたね。」というのがあります。その言葉だけを声かけするのではなく「〇〇（課題名）のこここの所がよくできたね。」・「前回と比べてこんなににできるようになったね。」と細かく伝えることが必要だとわかりました。やはり、具体的内容を声かけすると生徒の反応も全く違い、その後の課題の取り組み方にも影響が出てきます。生徒がその時ががんばっている所を的確に見つけ、その部分を褒めることが生徒の成長につながると思います。

第三に、活動を始める時に雰囲気を作ることです。授業であれば、授業に関係のない、生徒が気になりそうな物は置かないこと、授業時間になったら遊びはやめさせ、席につくことや、本日のやることを伝えた上で作業を行わせるといったことです。特に最後の「事前にやることを伝える」ということは最も重要で、このことを伝えないと、動き出した生徒は先生一人では手がつけられなくなります。また、何か関係ないことを始めてしまった生徒への説得力に欠けるものとなってしまいます。他に授業以外に雰囲気づくりをすべきものが叱ることです。叱るときの雰囲気作りとは、生徒としてしまった悪いことを向き合わせる雰囲気を作ることです。先生と生徒、一対一で話すことはもちろん、周りに余分なものを置かないことも重要です。机があることで生徒が突っ伏してしまったり、他のものがあることで興味に移ったり、手遊びをしたりなどなかなか事実と向き合えなくなります。叱るということはボランティアの私にはあまり無いことかもしれませんが、雰囲気は皆で作っていくものと私は思っています。

今後は、今回ボランティアで学ぶことが出来た、“授業の雰囲気”を先生方・生徒と共に作りながら、生徒一人一人の成長の手助けが出来ようサポートをしていきたいです。



## 生徒が別室で過ごすということ

人間科学科 4年 青木友美

老松中学校で学校ボランティア活動をさせていただいて2年半が経ちました。その活動内容とは、学習に課題があり特別な支援が必要な生徒、また精神面において支援が必要な生徒へのサポートです。前期から約2カ月の間が空いて、後期の活動がスタートしました。

その生徒たちは、OSルームという別室に登校しています。生徒が別室で過ごすことにより、担任はもちろん、担任以外の先生にもその生徒の様子がよく分かるようになっていきます。それは、全教員で対応する仕組みと、別室という誰でも気軽に足を運ぶことのできる空間にあるためです。そうすることによって、担任と生徒という一対一の関係に留まることなく、複数の先生対複数の生徒というチーム対応の基盤を作り出すことができます。必要に応じて、専門機関との連携も考えなければなりません。それが、それ以前に教員同士の連携が重要であることを学びました。

そして、生徒の成長経過では、生徒に変化が見られるまでには時間がかかるため、すぐに結果を得ることに固執せず、長期的に見て、それぞれの生徒に合わせた支援を継続していく必要があると感じています。例えば、学習面において支援を必要とする生徒の場合、教員やスタッフによって、指導内容が大きく異なることのないように、教材や学習進度の共通理解を図るべきだと思います。そのため、老松中学校では個別の指導計画など個人の情報は、一冊のファイルに整理をするなど、工夫しています。また、精神面において支援を必要とする生徒の場合、何を望んでいるのかを、その生徒の言動から読み取り、強い叱責や強制はせず、常に認め、温かい気持ちで励まし、一貫した支援を行なうことが重要だと感じます。

さらに、OSルームは、個別指導・グループ指導ができる教室として、機能しています。別室登校の生徒は、通常学級の生徒と比べ、同学年の集団と関わる機会が少ないです。そのため、OSルーム内での同学年同士の関わりは、別室登校の生徒にとって、大変貴重な経験となります。グループ指導と意識しなくても、生徒同士で、計算するスピードを競い合うなど、切磋琢磨しながら成長しています。また、生徒がそれぞれの教室に戻る時間もあるため、個別指導も可能となる場合があります。

このように、別室はさまざまな側面から、生徒にとって有効な支援を継続できる場所であると思います。別室登校の生徒にとっての別室は、教室復帰のための一過性の場所ではなく、貴重な居場所であり、教師やスタッフにとっては共通理解の場だと感じます。これからも、そのことを心に留めて、OSルームを運営するサポートをしたいです。



発行日：2013年 2月15日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室

TEL：045-481-5661 (内線4228)

FAX：045-413-4154

E-mail：tfc-yakohama@kanagawa-u.ac.jp

URL：http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher\_training\_course/jyssp

発行日2013年 2月15日

# ボランティア通信

## 戸塚中学校&戸塚高校

### ○目次○

#### 【戸塚中学校】

経験を積んで見えてきたこと スタッフ 小高 敬史	1
学校ボランティア4年生 人間科学科 4年 松本大輝	2
土曜塾レポート 現代ビジネス学科 3年 守山涼	3
学校ボランティアで感じたこと 英語英文学科 2年 中谷 智美	3
時間を大切に 英語英文学科 2年 馬場成美	4

#### 【戸塚高校定時制】

学校ボランティアを始めて 科目等履修生 埜 和徳	5
ボランティアをはじめて 自治行政学科 1年 栗田佳苗	6

### 経験を積んで見えてきたこと

スタッフ 小高 敬史

私は、毎週土曜日に戸塚中学校で行われている「土曜塾」にボランティアで参加しています。大学4年生の時に参加して今年で3年目を迎えました。後期は前期から継続している2年生の生徒を2名と後期からは新しく1年生の生徒を1名みえています。どちらの生徒にも基本的には数学と理科を指導し、テスト前にはその他の教科の対策も行っています。

私は、後期に入り指導をしていく中で気になっていることがありました。それは、毎回の活動が一回一回で完結していて、前の週に学習した内容を十分に生かせずにいることでした。生徒たちからの質問も、前回の内容を忘れてしまっているような質問や前回の学習とどのように関係しているのかという質問を多く受けていました。この原因としては、今年度は土曜塾が一週間、二週間と中止になって、間が空いてしまうことが多く、前回学習した内容を忘れてしまったり、すべてやり終わる前に次の単元に進んでしまっていたのです。また、私自身も専門の教科ではないということでもう前の分野との関連を考えて指導することができていませんでした。

そこで私は、後期から短い時間でできる復習テストを行ったり、覚えておいてほしいことを口頭で質問してみたり復習の時間を少し多めに設けるようにしました。また、苦手なところやなかなか覚えられないところはしつこく何度も繰り返して質問したり、宿題のような形で何かプリントをわたすようにしました。その結果、進むペース自体は少し遅くなりましたが、生徒からの質問の回数も減り、内容も変わっていきました。さらに、プリントを渡したことで生徒自身が分からないところを自分で調べたり、家で勉強するという習慣も少しですがついてきました。また、私自身も復習の時間を多く設けたことでどこでつまづいているのか、何が分かっていないのかということとそのつど確認できるようになり、スムーズに指導できるようになっていきました。

今年度から「土曜塾」の運営方法も変わり、探り探りだった前期からある程度授業の形や関係づくりもでき少しずつ様々なことに目を向けられるようになってきました。その結果として今回の課題に気付くことができました。その中でも重要だと感じたのは2年間の経験を踏まえて前期のうちに多くのコミュニケーションをとり、生徒とある程度の関係づくりができたことだと私は考えています。人間関係が築けたことで生徒の方から質問や要望を伝えてくれたり、課題のプリントを渡すことがで